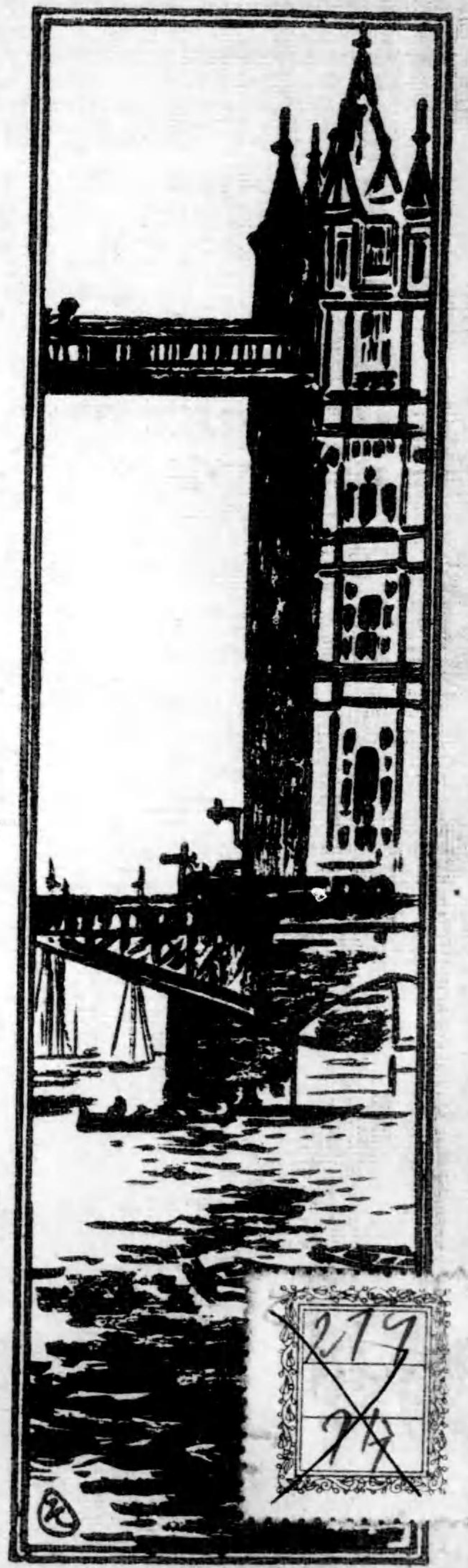


新派浪花節
ロンドン電報

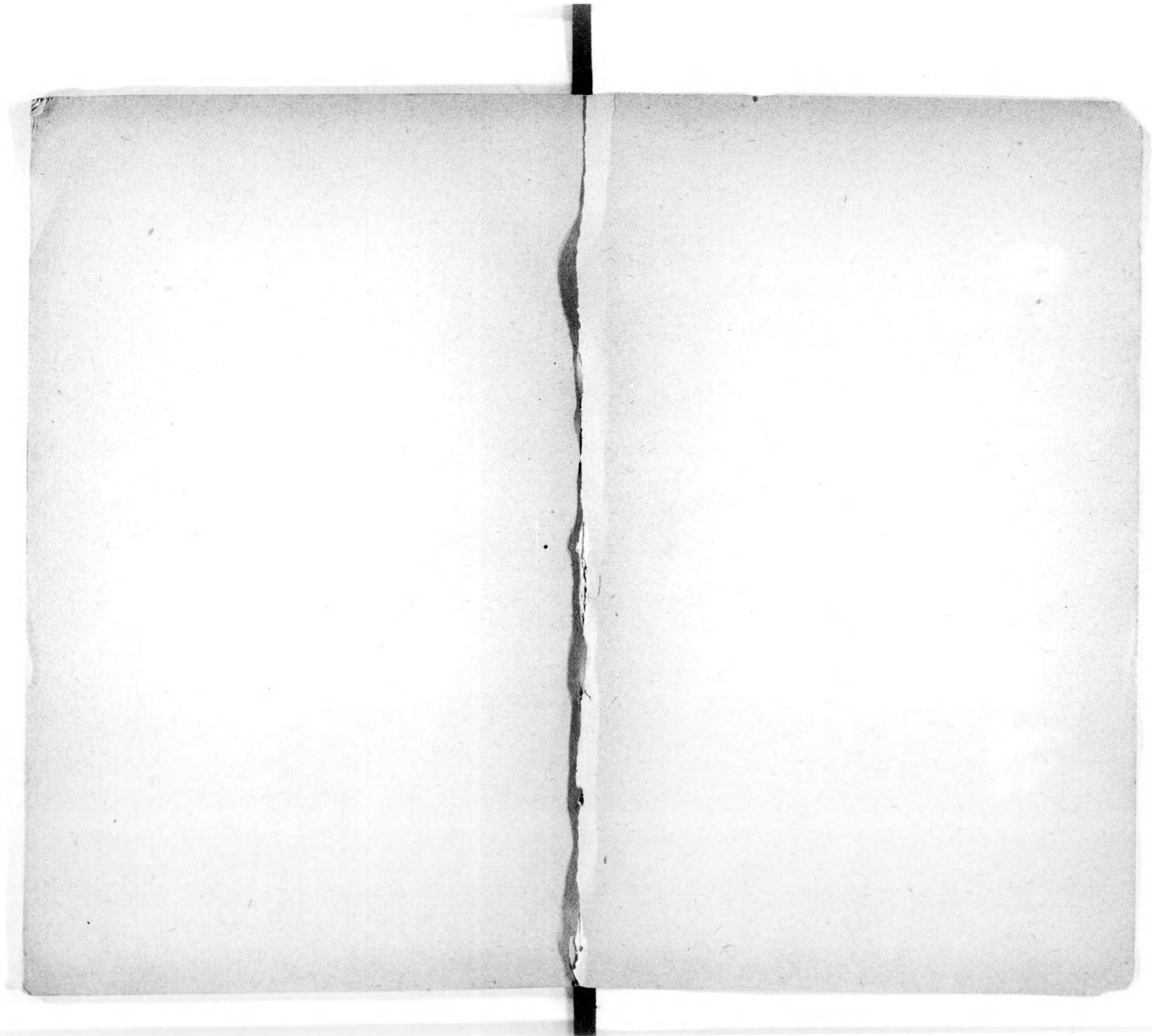
本多燕左衛門講演



0m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10m 50 1 2 3 4 5

始





特106

667



新派浪花節

ロンドン電報

大正
6. 6. 20
内交

自嘲

勿体なや、大枚の木戸錢を拂つてワザく聽きに
來てくださるお客様に受けるが故に、即ち拍手喝采
の數多きが故に、材料の時代後れも、結構の不自然
と俗惡を忍んで「ロンドン電報」を活字に移して、
書物に仕上げることを承諾せる也。

倘し、眞面目に、浪花節の向上、發展、と云ふことを
標準として謂へば、永久までも「ロンドン電報」の





如きを演ずる藝人と永久までも楽しんで「ロンドン
 電報」を聴く如きお客様の一日も速かに亡びて了は
 むことを祈るもの也。

ロンドン電報の講演者

燕 左衛門

淡くうきさるる花の影も
 空の青も木々の影も
 空の青も木々の影も
 空の青も木々の影も



ロンドン電報の講演者
燕 左 衛 門

浪新
花節派

ロンドン電報

第一席

本多燕左衛門講演
秋霧樓主人速記

フシム不義の富貴は空行く雲
三百萬の財産を
明け暮れめぐらす悪謀計
破邪の鏡に照らされて

風が颯と吹きや一場の夢
横領せんと悪人が
天道未だ地に墜ちず
跡なく消ゆる雲の影

牛込の二十騎町に、子爵華族様で佐原正則と云ふ人の屋敷がある、子爵ですから華族ですが、一つ物が間違つて、柄杓になると水を汲む道具が出来、六尺が晒しの臙鼻禪の寸法で、疝癪が男の苦しむ腰の病ひと昔から相場は極つて居る、勿體ない、有りがたい華族様と、コンナ愚らんものごとを引き合ひに出して、妙なことを申し上げかけると、彼の野郎、幸徳傳次郎の向ふを張つて、無政府主義の浪花節でも唸るんぢやなからうかと云ふお疑ひがあるかも知れませんが、そんな悪い量見は持つて居りません……動産ばかりが百萬圓、不動産を合せると三百萬圓以上の身代皇室の藩屏たる華族であつて、三百萬圓の財産が無くならず、チャンと景品としてクツ附いて居るのだから、恣態結構な身分は無い、併し天道は誠に公平なもの、爾う人間と云ふものを、好い事すくめに拵へては置かない、只だ見れば何の苦もなき水禽の、足にひまなき我思ひかなで、奥方の龍子と云ふ女が、元柳橋で左袂を取つて居た藝妓上り、藝妓だからと云つて必ずしも人間がお粗末に出来上つて居ると

云ふ筈はないが、何うしても長い間、浮氣稼業をして居ただけに、年を老つて居る御前様よりも若い男の方に目が着きやすい、家扶上りの家令松崎俊夫と云ふものと御前の目線を忍んで不義淫奔をして居る、何うかして可愛い自分の情夫に、三百萬圓の金をソツクリ持たして、面白可笑しく浮世三分五厘に暮らして見たいと云ふ、飛んでもない量見違ひを起した、類は友を浮ぶ、悪黨の仲間を引き入れて、病氣でもない至極健やかな御前を、精神に異状がある、到底子爵家の總大將と仰ぐことは出来ない、と云ふ難癖を附けて、屋敷の中に、暗い座敷牢を作つて、ポーンと投げ込んだ、爾うして財産横領にとかつた。

フシ、今日も今日とて 奥の秘密の一室に

集まり来る悪人共

主人公の松崎が

松「ヤ、皆さん御苦勞でした、突然お集まりを願つたのは、皆さんのお骨折で、何

うやら我々の思ひ立つた仕事も、十のもの九つまでは成功したやうに思ふが、まだ後に一部の残つた仕事がある、夫れは、我々が思ひ立つた仕事を片付けて了ふには、茲に二人の邪魔者がある、一人は今、英吉利のロンドン第二海軍兵學校に御遊學中の、御前の弟君の正義様で今一人は、屋敷に居る、忠義顔をして居る彼の妾の初枝と云ふ奴、此の二人が生きて居る以上は、假令ば我々の思ひ通りに、一旦は仕事成就しても、何だか枕を高く眠る事が出来ない恐れがある、妾の初枝は屋敷に居たつて多寡が纖弱い女だから、何日何時でも手は下せるが、弟君は血氣盛んな男子ではあるし、道程の隔たつた英吉利にお出でぢやから、此の人から先に片を付ける必要がある、之れが内地の事なら、誰に頼んでも、朝飯前の仕事ぢやが、言葉も風俗人情も違つた英吉利と云へば何うしても我々の重立つたものゝ一人が向ふの國に渡らない事には仕事が出来ないと思ふ、それで至急の御打合せをしようと思つて、今日お集まりを願つたのだが、誰彼と云ふより、河島さん、貴方は何うでせう、御足

勞ぢやが、英吉利まで出かけて下さらんか、貴方ならモウ確かに適任者だと思ふ」

河島猛と云ふ悪黨辯護士が、人殺しの適任者に選ばれる。

河「ハイ、我黨の事の成ると成らんとこの境ですから、宜しい出かけませう、幸ひロンドンを見物がてら、一仕事遣つて來ませう」

憔悴い奴があるものだ、見物がてら人殺しを受合つた。

松「早速の御承諾で辱ない、茲に三千圓の金がある、決して金銭に糸目をつける譯ぢやないが、飽までも大事に大事を取つて、遣り損ないのないやうに弟君の壽命を縮めて頂きたい、宜いお便りの來るのを、我々一同首を長くして待つて居るから」

河「承知しました」

フシ「四邊を憚る秘密の相談調ふて

悪人共は立去つたり

誰れ知るまいと思ふたが、天知る地知る人が知る、直ぐ隣りの部屋まで忍び寄つて、唐紙一重の陰で今の話を残らず立聞きをした男がある、誰だと云ふと、今英吉

利に、殺しに行かうと云ふ弟君とは切つても切れない乳兄弟の仲になつて居る忠僕
の安田宗平、別に秘密の話を盗み聞きをする積りで初めから来たのぢやない、お屋
敷のお掃除を受合つて来たが、何うも奴等の様子が怪しい、第一考へて見ると、御
前様の御病氣からして只ぢやアねえ、其處には底がありさうぢや、と思つて居る矢
先き、又虫の好かない奴等がポツ／＼御門を潜つて来る、今日は一つ——と勝手知
つたる屋敷の中、人目を避け、足音盗んで立ち聞きをすると今の始末
宗「ハ、ア飛んでもねえ奴等だ、海山も雷ならねえ大恩を蒙けて居りながら、其の
御恩を仇で返さうと云ふ犬畜生、好し、俺の耳に好い事を天道様が知らせて下さつ
た、之りやアうっかり掃除處の騒ぎぢやない」

セメ「夢中で歸つた白金町の自分の家」

宗「お光、今歸つたぞ」

光「アラ、お歸んなさい」

宗「サア、此間手前に預けたものを出して呉れ」

光「何を出すの」

宗「何をたつて極つてるぢやねえか、銀行の通ひ帳が要るんだ」

光「お前さん、大變周章てるが、お屋敷の掃除は済んだのかい」

宗「何うして、今日はお掃除處の騒ぎぢやねえんだ、さゝか、金を出せ、金を」

光「怪しいね、お屋敷のお掃除も済まない中に突然に歸つて来て、手も洗はなけり

や足も洗はないで、何んだつてお金が必要なの」

宗「要るから出させてんだ、女の出る幕ぢやねえ」

光「不可ないよ、昨日や今日の夫婦ぢやなし、十年も添つた女房に、斯う云ふ譯で
金が要ると、何故打ち明けて話をしないんだね、預つたものだから、譯さへ分れば
出しますよ」

宗「笹棒奴、何んでも宜いから出せ」

光「ハア、分つた、お前さん又初まつたね」

宗「何を？」

光「爾うぢやないかね、夫れさへなければ、全く惚氣る譯ぢやないけれど、お前さん位好い亭主は世間に有りやアしないよ、夫れがお前さんの玉に疵だよ、ア、嫌だ、又悪い虫が頭を持ち上げたね」

宗「俺が何を初めたんだ」

光「成田の不動様に、悪うございました、今度止しますと、斷物にして願ひをかけたから既う三年にもなるから、いゝ按配だと思つてたら又やる氣かい」

宗「だから何を初めたんだい」

光「白くれたつて駄目だよ、大きな聲で云つちや近所の人に聞かれて極りが悪いし、爾うかと云つて、小さな聲で云つたらお互ひに聞えないから、中位な聲で云つて、博奕さ」

宗「博奕……」

ボカリ 毆る。

光「痛いよ、髪が壊れますよ」

宗「痛けりや生きてる證據だ、フン、十三錢五厘か何んかで結つて來やがつた髪を氣にするない、痛え様に毆つたんだ、人の氣も知らねえで、誰が博奕をするんだ、一つ間違や二十騎町のお屋敷は暗にならうと云ふ境目だ、博奕たア何んだ、苟にも手前の爲めには俺は良人ぢやねいか、何故良人の云ふ事を聞かねえのだ」

光「へん、良人が聞いて呆れらア、お前さんの良人なんざア世間に通用する良人ぢやないよ、文句入りの良人てんだ」

宗「文句入りの良人、後學の爲めに伺ふぢやねえか、何んと言ふ文句入りの良人なんだ」

光「其の文句が時節柄始末がしてあつて、良人の下に、セイと二字だけ這入るんだ」

よ

宗「何を、良人の下にセイ」

繋ぎ合せて、

宗「臍肭獸とは何んだ（ポカリ毆つて）巫山戯るない、俺は北海道から来たんぢやねえや、金え出せ」

フシム煙に巻かれて女房は 立つて筆筒の抽斗から

光「さア、家の世帯の爲めを思はずに、何んでも遣つゝけるが宜いや、鼻をかむとお尻を拭くとも」

宗「馬鹿、世智辛へ世の中に、氣狂ひぢやあるまいし、貯金の通帳で誰が鼻をかむのだ」

怒り／＼貯金の通帳を手に取り上げて調べて見たが、さア困つた、忠義な男、正直な人間ですが無學で字が讀めない、馬鹿な事を云へ、今の世の中に數字の讀めない

い奴があるか、と云ふお叱りがあるかも知れませんが、成程數字は讀める、只だ數字と數字の間に挟まつて居る何十圓何十錢と云ふチヨイト片苦しい字が判然と讀めない、

宗「困つたなア、斯う云ふ時に亭主より嬢の方に學問があつちや全く巾が利かねえ今ニツ三ツブン毆つたんだから、急に頭を下げて聞く譯にも行かないし、又宗太郎の畜生、何をしてやがるんだらう、今日は土曜と云ふのに未だ歸つて來ねえ、チヨツ、自分で貯めた金を親子三人が、りて調べるなんて心細い事だ、ア、仕方がねえ……エ、今日は」

光「手前共は留守でございますよ」

宗「冗談云ふな、其處に居るぢやねえか、ね、お腹も立ちませうが、お神さん、御新造さん、早く云へば山の神」

光「五月蠅いね、何さ」

宗「此方は氣が急ぐんだ、一寸此通を調べて呉れ」

其處は夫婦の仲ですから、機嫌を直して

光「お貸しよ」

と貯金の通ひを取り上げて

光「お前さん、まア大變だよ」

宗「金が無えのか」

光「イエ、有り過ぎるのさ、塵も積れば山とは能く云つたもんだね、六百二十圓ありますよ」

宗「六百二十圓、そいつは有りがてえ、足りない處は又何んとか都合するから、銀行の奴等の驚ろくやうに一遍に出して來い」

光「此のお金を一遍に出して、お前さん何うするつもりさ」

宗「何んでも宜いから出して來い」

云ひ出したら聞かぬ良人の氣性、仕方が無いから銀行へ駆け付けて、六百二十圓の金を持つて來た」

光「さ、お前さん取つて來ましたよ」

宗「オ、御苦勞」

大東の六百圓だけを自分の懐中へ捻ぢ込んで五圓紙幣が四枚、二十圓の金を女房の前に並べて、

宗「ア、構はねえから納つとけ」

光「アラ、一寸氣前を見せるぢやないの、お米屋の拂ひが大分溜つてるんだよ、色の黒い力ぢやんと云ふ小僧さんが、お神さん濟みませんが少と入れて下さいと、始終來るんだから二十圓だけでも投り込んで置くのかい」

宗「馬鹿、此の不景氣に米屋の拂ひなんぞ眞面目にして何うするんだ、米屋の拂ひなんか當分延期だ」

光「嫌だよお前さん、近所に聞えるよ」

宗「聞えたつて構はねえ、さア驚ろくな、お屋敷の御用で、俺は英國のロンドンと云ふ處まで大急ぎで一才一走り行つて來るのだ、一月や二月で歸れるか、夫れとも半年一年と手間取るか、明るい人に尋ねてから出かける積りだ、俺の居ねえ留守は宗太郎と二人限りだ、二十兩あつたら澤山だ、二人で喰ひ繋ぎして置くん、何んで膨れ面しやがるんだ、物を知つた學者に聞いて見ろい、夫婦は苦樂は共てんだい俺の好い時に手前も樂をしやうし、亭主がしけた時に、嬢が共に泣くのは人情だらうぢやねえか、若し此の二十兩の金が無くなつて了ふまで、俺が歸らなかつたら、其の時にやア仕方がねえ、災難だと諦らめて、近所のお神さん見たいに内職でもして居ろい」

光「嫌やですよお前さん、ハッキリしてお呉れよ、何んだつて又粹狂に煙草の名見たいなところに出かけるのさ」

宗「黙つてろい、後で斯う云う譯と分つたら、ア、成程、家の御亭主は豪いもんだと手前が二度ツ惚する時節が到來するんだ」

夫婦の争つて居る處へ、學校戻りの長男の宗太郎

粹「阿母さん、今歸つたよ、見てお呉れ、今日はお清書に甲を貰つて來たよ」

光「宗ちゃん静かにおしよ、今日は阿父ちゃんが何んだか怒つてるのだよ」

粹「父が怒つてるのか」

光「だから静かにおしよ」

父「オ、宗太郎、好い處へ歸つて來た、手前にも一度話があるんだ、此方へ來い」

フシ「夫婦が中の一粒種 宗太郎の手を取つて

連れて這入つた奥座敷

宗「なア宗太、俺は今阿母にも一寸話をしたんだが、お屋敷の御用で英國のロンドンと云ふ處まで出かけるのだ、俺が居ねえ中は、母ちゃんと二人限りだが、父が居

ねえと思つて母ちやんに駄々を捏ねたり、學校を情けたりなんかすると承知しねえぞ、俺なんざア情けねえ時節に生れ合して、學問の無え人間で駄目だが、お前なんざア學問次第腕次第で、どんな豪え出世だつて出来る人間だ、ウンと一つ勉強して大きくなつたら、御恩を受けたお屋敷の御用に立つやうな、大きくなつたら、國の爲めになる、立派な人間になれ、好いか、夫れから立つ前に、コンナ下らねえ事を云いたかねえが、國が違へば水が違ふとか云つて、若し俺が向ふの國に行つた切りにでもなるやうな事があると、餓鬼の前で恪氣をやいて云ふ譯ちやねえが、母ちやんは未だ年が若えんだから、爾うなつた日には俺の代りに他の阿父ちやんが来て、此處の家の世話をして呉れるだらう、そしたら其の人をば眞實の俺だ、阿父さんだと思つて云ふ事を聞いて孝行するんだせ、之りやア俺の阿父さんでねえ、俺の阿父さんはロンドンに行つてるんだ、阿父さんが違ふなんて生意氣な事を云ふと、一生日蔭の花で、手前苦勞するぞ、勉強しろ、勉強して豪え人間になる工風をしろ、阿

父さんの頼みだせ」

フシム 悲しく云はれて 宗太郎

子供心に涙

宗「何んだつて泣きやがるんだい、コン畜生、弱虫だな、泣くやうな話を何時阿父さんが爲たい、手前が泣くからツイ情が移つて俺まで悲しくなつて了うちやねえか、さア之れを遣るから表へ行つて遊んで来い」

フシム 青竹を二つに裂いたやうな男

飽かぬ別れを妻子に惜しみ

四五日経つて横濱に出る

何處を何う云ふ具合に工面をしたものか、一心は恐ろしいもので、旅行券の仕度も出来て、古着屋に飛び込んで買つて来たのがポロロの古洋服、今まで絆纏、襦袢を着て威張つて居た男が初めて洋服を着る、宛然西洋の判じ物見たやうなものが出来上る、主人の生命を助けたいゝの一念で、乗り込んだのが英國行きの汽船である。

第二席

フシム出帆間近となるならば
 黒き煙を後にして
 甲板の上にも宗平が
 涙ながらに見願れば
 此方に霞む山蔭は
 涙に咽びて鳴く千鳥
 鵬程萬里の苦枕
 月を旅路の友として
 紅の海てふレツドシー
 絶えぬ機關の働らきに

碇が上る笛が鳴る
 波を蹴立て、行く船の
 之れが日本の見納めかと
 彼方に見ゆる観音岬
 安房か上總か下總か
 聲も一入哀れなり
 波より出で、波に入る
 港々で一息入れて
 地中海をも横切りて
 目ざす英國ロンドンの

テームス河の河岸まで

宗平を乗せた船は着いた、波止場へ上つて見ると宗平驚ろいた、知るは憂への初
 めと云ふ英國と云ふ國は、コンナ言葉を使つて、朝晩コンナ儀式がある杯と云ふ事
 が分つて居ると何うしても固くなる、宗平のは爾うちやない、何しろ廣い世界に銀
 座の大通り位賑やかな處があるもんか、憚りながら江戸ッ子だ、矢でも鐵砲でも
 持つて来い、只だ坊チャンのお生命を助けて上げりやア役目が濟むんだと云ふ勢ひ
 で船に乗つた、下地が船に弱い、眞暗な三等室の隅つこに始終横になつて居て、滅
 多に甲板の上にも出て来やアしない、ドンナ港に碇泊しても、一切上陸もしない、
 見物は歸りに坊チャンと御一緒にする、心の中に成田の不動様を念じ、お目にかゝ
 るまで坊チャンの御身體に怪我誤ちのないやうと、夫ればつかりを祈つて、何んの
 事はない、横濱から一直線にロンドンまで持つて來られた、申し上げるまでもなく
 世界で一二と云ふ大都會、迎も其の頃の銀座の大通りなんかと比べにならない、宗

平氣の抜けた風船玉見たやうに、只だ茫となつて了つた。

宗「へエ、恐ろしい處だなア、之れが英國ロンドンと云ふ處か、今船から上つたんだから、茲が支關かな、奥の座敷にはドンナ宜い處があるのだらう、ハ、ア高え家を拵らへやがつたな、毛唐々々と何うして馬鹿に出来ねえ、丹念なもんだ、二階があつて、三階四階五階六階、彼れから先きは勘定が立たねえ、何うして淺草の十二階なんか跳足だよ、之りやア餘計な心配するやうだが、一つ地震でも揺つたら家の跡始末は誰れがするんだらう（ブウ〜）オ、危ねえ〜、何んて早え車だらう、豪えもんだなア、彼の車を發明した奴も豪えが、乗る奴は餘ッ程癪癪持ちだせ彼りやア、早いにも早いが失禮な車だ、お尻から煙を出して、尻垂れて横町に曲つ了やがつた、ア、又來た〜、大勢人が乗つてやがるな、待てよ、俺は何も高え船賃を使つて、ロンドンを褒めに來た譯ぢやねえ、坊チャンの居なさる處に行かなくちやアならねえんだが、何處かに交番は無えかな、交番見てえな家は一軒もありや

アしない、ハ、ア、ロンドンにも焼打が流行つたな、彌次馬の奴が皆んな交番を片付けて了やがつた、何、聞くは一時の恥だ、一つ打つかつて尋ねてやれ

宗「へエ、少々伺ひます、エ、第二海軍兵學校と云ふ處に主人を尋ねて行くんでございませうか、道が分らなくつて困つて居ります、濟みませんが、何う行つたら宜いんでございませうか」

△「アイキヤンナット、アングースタンドエー」

宗「チエツ、人が知らねえと思つて他行きの英語なんぞ使ふな、だから俺は毛唐の野郎は嫌ひだ、覺えてやがれ、又風の吹き廻しで東京にでも來やがつたら、向ふ脛を搔つ拂つてやるから……ア、此の人は宜いや、此の人は莞爾〜笑つて居る、此の人に尋ねて見やう……エ、第二海軍兵學校に參りますにや、何の道を行つて宜いんでございませうか」

○「オーマイ、ヒートリカ、ツレシヨナイカ、ツレレーシヨ、アートカラ、カゴ

デクール」

宗「さア分らない フシム伊勢の濱荻浪花の蘆、國が變れば言葉の變る」困つたなア、此處まで来て坊チャンの居なさる處が分らなくつちや仕様がないなア、嫌やに空が曇つて来やがたが、降るのか知ら、暮れるのか知ら、俺は何うしたら宜いんだらう」

とまご／＼して居る處に、六尺大の一人の男、勢ひよく洋杖を打ち振りながら出て来て、まごついて居る宗平にドンと打つ付つた拍手にポケットに手を入れた、アツと云ふ奴を突き飛ばして一目散、

宗「痛えなア、道を退けなら退けと爾う云へ、突き飛ばさなくつたつて宜いちやねいか、オ、痛え／＼……アツ泥棒々々」

と後を追ひかけて来たが、人ごみの中に姿が消えた。

○「日本人、パン買ふよろしい」

フシム辨髪長き一人の支那人

宗「オ、宜い處に来たね、チャン……兄弟、宜い處に来たせ、恥を云はなきや分らねえが、只た今俺が船から上つて、幾ら自分の行く處を尋ねても言葉が通じねえから、判然した事は分らず、まご／＼して居ると、此方にも居るんだね舶來の巾着切と云ふ奴が、俺にドンと打つ付つたかと思ふと、なけ無しの金を皆んな持つて行つて了やがた、金は何うでも宜いがな、お前日本の言葉が分るだらう、濟まねえが第二海軍兵學校に行く道を教へて呉れ」

支「日本人、私、パンの商賣、道案内ぢやない、パン買ふよろしい」

宗「そりや分つてるぢやねいか、商賣は商賣ぢやねえか、其處を俺が頼むんぢやねえか」

支「パン買ふよろしい／＼」

宗「第二海軍兵學校に行く道を、只つた一口教へて呉れても宜いちやないか」

支「日本人、貴方尋ねる處第二海軍兵學校あるか」

宗「ウム爾うだ」

支「オ、不思議な事ありますな、私、最初波止場パン賣る、日本紳士一人、ダラ澤山呉れます、其の人道尋ねます、矢つ張り第二海軍兵學校ある、同じ日本人、同じ日尋ねる處第二海軍兵學校、教へる人私、之れ誠に不思議ありますな」

宗「エツ、何んだ、日本の紳士が最前波止場でお前に金を呉れて第二海軍兵學校に行く道を聞いたと、失敗つた、お前に云つても分りやアしめえが、其奴は俺の敵だ俺の御主人の生命を取りに行く奴だ、何うか済まねえが道を教へて呉れ」

支「ア、日本人、兎角物事交換ある、パン買ふよろしい、道を教へます」

宗「未だあんな事を云つてやがる」

と何氣なくズボンの隠しに手を入れる

宗「オ、有つた支那人、有つた」

「フシ」天の助けか残つた金が僅かに三圓

此の金を打つちやれば、水一杯茶一つ飲む事さへ出来ない、

宗「パンは幾らだ」

支「金幾らある」

宗「此方の金を聞かなくつたつて宜いぢやないか」

支「私、パン大安賣り、一個一圓」

宗「一個一圓なんてパンがあるかい、ど、何うせ足許を見てるんだ、道を教へる駄賃に金は皆な遣る、何の道を行くんだ」

ワン、ツ、スリーと數へて渡した三個のパン、

支「第二海軍兵學校なア、此の廣い町眞直ぐ行く、分るか」

宗「此の廣い通りを眞直ぐに行つて？」

支「角に樹茂る公園ある、公園角右曲る、又眞直ぐ行く煉瓦作り病院ある、分るか」

其の病院前坂下ります、又真直ぐ行く、一寸左に折れて又右に曲る、其處で詳しく聞く、よく分る」

宗「オイ、そんな事云つたつて仕様がねえぢやねいか、判然教へて呉れ」と云ふ奴を、エ、面倒なと三圓の金を掴んで日本人アバアと云ひ棄て、一目散に駈け出した。

フシム幾千萬里の波を越え
遙々尋ねて来たものを
道を聞いても教へて呉れず
魂しい抜けて只だボンヤリ
亡び行く人の生命の果敢なきを
茲も同じく諸行無常と消えて行く
死ぬと覺悟を極めまして

お主の生命を助けんと
金は奪はれ其の上
思案に暮れて宗平が
啜り泣きして佇む折しも
示すに似たる鐘の音は
寧その事に宗平は
屠所の羊のトボくと

出で、來つた海岸の波打際
寄せては返す波の面
胡馬北風に嘶きて
思ひ出だすは故郷の
思へば宗平胸迫り
先き立つ我を怨むなよ
萬分一の御恩返しが爲たい爲め
我を無常と怨むなよ
既う之れまでと宗平が
躍り込まんとした刹那
待てと一聲抱き止めれば
尋ねる第二海軍兵學校長

石や小石を拾ひ上げ
昵と覗いて見て居れば
起鳥南枝に巢ふの譬へ
空に残した妻子の影
之れお光之れ宗平
受けし御恩は淺からず
異國の海に身を投げる
口に唱ふる佛の御名
逆巻く怒濤の其の中へ
訛り怪しき日本語で
地獄で佛とは能う云ふた
シ ヨ ン ラ ー ク

宗平が涙ながらの物語りを
國の東西世の古今
筋はり助けて連れて歸った兵學校
川島辯護士向ふに廻して

聞いて目色毛色は違ふても
情の底に變りはない
茲に二人が力を合せ
如何なる苦心致すかは次の段

三

フシ咲き揃ふ堤十里の花陰に

二十四番の風吹けば

誰が繋ぎけん若駒の

心も空に氣も勇み

鬣振ひ嘶いて

行く水に散る花吹雪

今逆巻く波の中に身を躍らせんとした一刹那、後から「ホールド」と身體を羽飼
べめにして、ズル／＼と後へ引つ張つた。

宗「死な、やきならない譯がございませ、何うぞ止めずに殺して下さいまし」

校長「ア、日本人一寸待つよろしい」

初めて訛り怪しい日本語は宗平の耳に入つた、ハツと思つて振り返つて見ると、
格腹の嚴めしい、六十過ぎた、白髯は胸まで垂れた英國の海軍士官が一人立つて居
る、

正「貴方様、日本の言葉がお分りでございませるか」

校長「ア、日本人、貴方何の爲め死にます、日本人戦強い、生命棄てる事何とも思
ひませ、夫れ誠に野蠻あります、貴方何の爲め生命棄てます、詳しく物語るよろ
しい」

宗「へエ、私だつて粹狂に生命を打つ棄りたくはございませませんが、實は遙々此方へ
参りまして、自分の行く處が判りません爲めに、不知飛んだ了見を起しました、貴
方様が日本の言葉がお判りでございませたら、恐れ入りますが人の生命が助かるの
でございませから、第二海軍兵學校へ参ります道を教へて頂きたいのでございませ」

校長「何、貴方第二海軍兵學校へ行く道が判らない爲め生命を棄てますか、誠に不思議ありますな、貴方尋ねる第二海軍兵學校長ジョンラーク私あります、貴方何の爲め生命棄てる、詳しく物語るよろしい」

宗「へエ、それチャア彼の貴方様が學校の校長様？へエ、有りがたうございます、此處で校長様にお目にかゝるとは、まるで夢の様な心持が致します、貴郎様が校長さんなら親だと思つて、何も彼も打ち明けてお話しを致しますが、實は貴方様のお手許に御厄介になつて居ります、私の主人の佐原正義、東京のお屋敷に悪人共が蔓つて、三百萬圓の財産を欲しいばかりに、御前様を座敷牢に投り込んで、其の上、此方にお出での坊チャンが、生きてお出でなすつちやア爲めにならないと、川島と云ふ悪黨辯護士が、高い金を使つて殺しに来ると云ふ相談を陰で立ち聞きをして、其奴は大變だ、何うか助けて上げなくちやならないと、校長さんの前ですが、私は無學で何にも知らねえ人間ですが、何うかして御恩返しをしたいと思ふ計かり

に、家内や子供を彼方に殘して、遙々此方まで参りましたが、第一口を利いても言葉は通じず、加之に持つてる金は皆な取られて了つて、エ、寧その事と心細い了見を起しましたやうな譯で、貴方様が校長様でございましたら、此の通りにお願ひ申します、何うか坊チャンのお生命を助けてやつて下さい」

校長「ア、分りました、貴方の言葉は能く分りました、校長親ある、生徒子ある、子供の生命取る人、私誰れでも許しません、心配する事ない、貴方の主人正義さん只今から一週間前、ポートルースの爲めチームス河上流、一中隊の兵士連れて参ります、只今アブセント、おう日本言葉留守、分るか、學校居りません、貴方の精神誠に忠義、心配する事ありません、旅の疲勞あるでせう、學校來るよろしい、お宿します、御馳走致します、心配することない」

シム目色毛色は違ふても 情の底に變りなく
劬はり助け連れて歸つた兵學校 一室を當てがい食事を與へ

旅の疲勞を稿らひ呉れる

其の翌日、兵學校の正門を潜つて玄關先に通つた日本の紳士が一人、云ふまでもなく之れが悪黨辯護士の川島猛、先づ校長に面會を求めて、それから徐ろに仕事にかゝつてやらうと云ふ考へ、一枚の名刺を渡して校長に面會を求め、ボーイが取次ぐ名刺を見て、校長打ち領き

校長「ハ、ア、扱ては來たな、よし、一つウンと威嚇してやらう」

と應接間に通す、暫らく待たして置いて、乃へ這入つて來たのが校長ジャンラーク、御承知の如く日本では帽子を脱ぐか頭を下げて挨拶をするのですが、向ふの國ではセークハンドと云つて手を提つて挨拶をする、彼れはお互ひに固く手を握り合ふのが本式だと云ふ事ですが、中には忙しい人もあれば暇な人もあり、爾う一々固く握ると云ふ譯にも行かない、大抵は簡略で済ましてある、處が校長、此の悪黨が俺の預つて居る生徒の生命を取りに來たかと云ふ怨みがあるのですから、恐るゝ

川島が長く出す手を、グツと握つて力一杯に掴んだ、幾ら固く握るのが情に厚いと云ひながら、程度と云ふものがある、酷く掴まれて川島は恐ろしい力のある奴だなど口を利かぬ先に聊か毒氣を抜かれて了ふ、夫れから初對面の挨拶が済んで、

川「實は貴方のお手許に御厄介になつて居る手前の主人佐原正義、東京の屋敷に或る重大な問題が起きて、是非共正義さんの身體が入用である、修業中途で、學問を止さして連れて歸ると云ふのは、誠に不本意な事ではあるが、裡面に蟠つて居る事情をお汲み取り下さつて手前と同行して、日本に歸ると云ふ事をお許し下さい」と誠しやかに申し込んだ、校長が聞いて此の馬鹿野郎、此方が何にも知らんと思ふのか、宗平からの話で何も彼も知つて居るのだと心で嘲笑ひながら、向ふに云ふだけの事を云はして、

校長「川島さん、誠にお氣の毒あります、貴方此方へ來る船の中、波の上、何事も御存知ない、貴方の主人正義さん、只今から一週間前、ボートレースの爲め、一中

隊の兵士連れて、テームス河上流参ります、日本では見る事の出来ません廣い海、長い河、分るか、風吹きます、波立ちます、一中隊の兵士、貴方の若主人乗込みましたボート一度にアブセット、おう日本言葉顛覆分るか、船顛覆します」

川「エ、船が顛覆を致しました」

校長「おう、其の事ある、私、悲しみます、貴方の主人正義さん、一中隊の兵士諸共亡くなります、貴方此方へ来る途中話御存知ない、私校長としてお目にかゝる面目ない」

川「それちやア何でございませるか、若主人は一中隊の兵士と運命を共にして、彼のテームス河で溺死を致しましたか」

校長「おう、其の事ある、東京お屋敷へ、電報手紙詳しくお知らせします、貴方船の中、行き違ひ、何にも御存知ありません、誠にお氣の毒あります」

フシ「寝耳に水と驚ろいて 流石 悪黨 川島 が

川「校長、夫れは貴方嘘ちやございませぬ、眞實の事でございませるか」

と問ひ返すと、茲が校長の豪い處、見すく嘘を云つて置きながら、勵聲一番、

校長「川島さん、ナニ云ひますか」

と太い聲を出した、餘り聲が太いので、應接室の硝子窓が三枚毀れたと云ふ、それは餘り大業だが………。

校長「川島さん、私言葉貴方嘘思ひますか、爾うでせう、日本ゼントルマン、爾う申しては失禮ですが、十人の人九人皆なナリ上り者あります、日本紳士皆な金あれば皆ゼントルマン、英國のゼントルマン違ひます、英國の紳士嘘吐く大嫌ひ、嘘吐く事生命棄てるより苦しみあります、英國ゼントルマン嘘吐きませぬ」

頭頭嘘を真で通して了つた、

川「ヤ、之れは御無禮を申しました、決して英國の紳士を疑つたと云ふ譯ではございませぬ、主従の情と致しまして、餘り意外なお話を承はりまして、私の心持が

轉倒致しまして、不知言葉が迂つて申し譯ござりません、併し意外なるお話を承
はりまして、泣くに涙も出ない位でございます、何かの御相談や、お願もござりま
するが、何れ改めてお尋ねを致す事に致しまして、今日は此の儘失禮を致します」
と這々の體で宿へ引取つた、校長は後で腹を抱えて大笑ひ、宗平も蔭ながら話を
聞いて、宜い氣味だと喜んだ。

フシメ待てば程なく二日目に
一 中隊の兵士を率ゐる
ボートレースも済みまして
最と健やかに若主人正義は歸り来る

校長が出迎えて

校長「貴方のお國から、忠義な人が来て居られます、逢つて詳しく話を爲なさるが
宜からう」

フシメ云はるゝ儘に来て見れば
絶えて久しき忠僕宗平
おうお前は宗平若様と
互ひに手と手を取り合ふて

包むに餘る嬉し泣き

聞く事毎に意外な事ばかり、國の屋敷には悪人が蔓つて、三百萬圓の財産を横領
する爲めに、お兄上を座敷牢に投り込んで、剩さへ川島が、此の生命を取りに来た
と云ふ、翼あらば飛で歸つて、悪人共を退治でやりたいと思ひますが、ロンドンか
ら日本へ歸るのですから、爾う一朝一夕に歸る事は出来ない、校長の許しを受けて
汽船會社に電話を以て照會すると、明日一日隔いて、明後日の午後に東洋へ廻る船
が出るゝと分る、氣が急から其の船に乗つて歸る事となり、種々仕度にかゝると、
宗平が長の船の旅をして、途中で種々な氣苦勞もして、漸との事で主人に逢つた嬉
しさに、ボンヤリ氣抜けがして、茫ツとなつてゐる、

「正、おい宗平、しつかりせにや不可、お互ひに之れから日本に歸つて悪人共を相手
にして文明の戦争をなさやアならん重大な責任があるぢやないか、さア宗平しか
りせい、それで愈々立つのが明後日の午後三時だ、明日一日は暇だから私が案内者

になつて、お前を一つ客に見立ててロンドンの市街を見物さしてやらう、迎も一日や二日では見物しきれないが、目貫々々を見て置けば、又話の種にもなるからかう
宗平

宗「へエ、それぢやア彼の坊チャンが案内者で、私がお客様なのですか」
正「まあ爾うだ」

フシ「喜び勇んで其の翌日 寄宿舎を出る主従二人」

一々正義が説明をする、彼れが何と云ふ公園ぢや、彼れが斯う云ふ歴史付の建物ぢや、彼の橋を見い、彼れがロンドンブリツヂと云つて、彼の下を流れる河がテムス河ぢや、彼の工事には何れだけの金がかゝつて、彼の橋の上を一時間に何萬人の人が往來する、

フシ「土産の種に 彼れも之れもと聞く度に
宗平 一々驚ろいて 銀座通りの自慢も出です」

江戸子の影法師薄く尾て行く

セメ「其の中」

日はトツブリと暮れ果て、

いざ歸らんと主従が

近道を取つて出て來たのが市街の中程から少し片寄つた處にある公園實に田舎ありとやらで、今までの雑沓と違つて、電燈の影薄く、コンモリ茂つた木立の間に淋しい噴水の音などが聞えて森として居る、

正「何うだ宗平、宜い處だらう」

宗「へエ、大變静かです、之りやアロンドンの郡部でございますか」

正「ロンドン郡部と云ふ奴があるか、矢張り之りやア市街の中程にある公園ぢや、静かだらう」

宗「ハア、森としますね」

正「静かで思ひ出したが、此の公園とね、好く模様似た公園が東京に一つあるんだ、屋敷から遠いが、お前東京で育つたんだから考へたら思ひ出すだらう何うだ」

宗「爾うですね、ハア坊チャン、爾う有仰ると芝の公園ぢやございませんか」

正「ウム、目の寄る處に玉だな、俺もそんな氣がするものだから、土曜や日曜に暇があるとな、態々此の公園に来て其の邊のベンチに凭れて、自分が日本に歸つた心持で、腰を卸して眠と眼を閉つて、お前やお兄様に逢つたやうな氣持で居て、ヒョツと目を開くと、矢張り元のロンドン、其の時は何とも云へない儂ないやうな懐かしいやうな氣持がする、彼れが矢張りホームシツクの一種だらうな」

宗「へエ、ぢやア坊チャン、又何處かヘステーションでも出来るのですか」

正「何うして」

宗「だつて、ブラットホームと有仰るぢやございませんか」

正「馬鹿云へ、ブラットホームぢやない、ホームシツクと云ふのだ、異郷に在つて故郷の事を痛切に忍ぶ心持をホームシツクと云ふんだが、お前にそんな事を云つて聞かしても分るない、併し宜い處だらう」

宗「ハ、ア宜うございませぬ、待つて下さいよ、之れが芝の公園だとすると、ねえ

坊チャン、芝園橋は何の邊でございましたらう」

正「馬鹿云へ、ロンドンに芝園橋があるものか、只だ之りやア其の儂が似て居ると云ふだけだ」

宗「ハ、ア、成程、夫れで毛唐の奴が橋を儂約しましたね」

正「誰が儂約をするものか」

笑ひ興じて、木下暗を傳つて、先に主人の正義、後から宗平が續いて來ると、

セメ、忽ち暗を貫く一發の砲聲 先に立つたる主人の正義が

バツタリ 倒れて

正「ウ、ム」

宗「オ、坊チャン、お、お怪我はございまんか」

正「大丈夫だ、俺の身體に怪我はない、又二發目の玉が來るよ、身體を伏せ、身體

を伏せ」

宗「エ、お怪我は」

主人の身體を案じ、狼狽えて取絶つて居ると果せる哉、又も續いた二發目の拳銃、狂ひ違はず宗平の脾腹の邊を貫ぬいた。

宗「呀ッ、射られました」

正「それ見ろ、云はん事ぢやない、二發目の玉が來ると云つたぢやないか、身體を伏せいと云つたに、愚圖々々するからコンナ事になるのだ、宗平シツカリせい」

宗「ウ、ム」

正「何だ、貴様も江戸ッ子ぢやないか、針で突ついた位の傷を受けて、何を唸つて居るんだ、此處ぢや醫者や藥の手當ても出来ないから、彼の森を抜けると、既う直ぐ學校の寄宿舎だ、寄宿舎に歸つて、手當てをしてやるから、俺の肩に絶れ、さア俺の肩に」

宗「坊ちゃん、既う宗平は助かりません」

正「馬鹿な事を云へ、しつかりせんか」

フシメ口では氣強く云ふものゝ

色青ざめて眼は据り

所詮助かる生命でない

暗を透して睨と見れば
四邊一面血潮の泉

正「ア、残念な事をしたの宗平、俺の聲が聞ゆるか、コレ俺の顔が見ゆるか、お前の負傷は浅いで、學校に連れて歸つて、醫者も呼んでやる、藥も求めてやるが、日本へ歸る船の出るのが明日の午後ぢや、ヒョットしたらお前だけ残して俺一人が日本へ歸らにやならんかも知れん、力を落すな、假令分れ〜になつても、お前が遙々ロンドンまで、私の生命を助けに来て呉れた好意だけは忘れはせんぞ、宗平しつかりせい、俺がの、一人先に歸つたら、必ずお前の家内や子供が屋敷に尋ねて來て、家の人からの便はなかつたか、阿父さまからの傳言はなかつたかと、せがん

で俺に聞くぢやらう、其の時に俺は何と云つて……コレ宗平、しつかりせんか」

「フシ、苦しき息を吻と吐き

若旦那様宗平は

貴方の影身に添ひまして

屹度退治て御覽に入れまする

國に残した悴の宗太

世間知らずの頑是なさ

一人前の人間に

之ればつかりが冥路の障り

貴方と私は身分も違へば位も違ふ

同じ日本に人となり

分けて育つた乳兄弟

涙で見上ぐる主人の顔

假令ロンドンの士となりまして

お家に蔓る悪人共

今はの際に一つのお願ひ

明けて今年が九つの

生先きとても氣にかゝります

育て、やつて下さいませ

若旦那様

夫れが不思議の御縁にて

貴方と私は二つの乳房を

此の世の縁は薄くとも

節は次の段

死んで未來の先の世に
必らず共に宗平の
深傷の手疵に目が眩み
お名残り惜しうござります
云ふも苦しき虫の息
雲を破りて洩れ出づる
人の哀れを啼いて行く
宗平の遺髪を收め日本に歸る

茲は牛込二十騎町、佐原の屋敷に黨を作つて集る悪人相手にして、正義苦心の一

人と生るゝ事あらん
名を忘れてばし下さるな
お聲が聞えぬお顔が見えぬ
之れが此の世のお分れと
天も地上の悲劇を哀れんてか
月を掠めて杜鵑
涙ながらに正義が

第三席

フシム瀬

は 淵

と

それよりも尙ほ人心
今日降る雪に月を待つ
それが嘘なら一しきり
髭を生した學者も
頼みもされぬ他所行きの
時は元祿十五年と
見て来たやうに唸つて見たが
今世間が陽氣の加減で進歩して
四百餘州の果てまでも
匙とナイフで食ふやうな
分つた振りして見物し

淵は瀬となる飛鳥川
昨日の花を塵と見て
兎角浮き世は浮き沈み
丁稚小僧や職人や
咽に筋立て汗垂らし
親に不孝の聲張り上げ
師走中旬の仇討ちを
浪花の花も一盛り
日本は愚か朝鮮や
鮪の鮨にバタ付けて
片假名まじりのイチヤ付きを
それで足らひで四十男の分別盛り

耻も慮外も顧みず

黄色い聲を張り上げて

カチューシャ可愛や別れの辛さ
有りがたいよで情けない

云はなきや時勢に後れるとは

ロンドンの公園で、二發の拳銃を向けて、首尾能く若主人の正義と忠僕の宗平を
仕止めたものと信じて、川島猛が勇んで日本へ歸つて来た、處が其の實、若主人は
助かつて、忠僕だけが身代りになつて死んだと云ふ事を知らないのが悪人の手ぬか
り、牛込二十騎町、佐原の屋敷に來つて、一同の悪人を集め、
川「御安心下さい、大地を打つ槌は外れても、亡くなられた若主人が、生き長らへ
て日本へ歸られるやうな事は斷じてない、一旦は校長の計略にかゝつて、既に手を
空しく立ち歸つて來る處でしたが、旨く先方の謀の裏を搔いて、斯う云ふ風にし
て二人共仕止めて來ましたからお喜び下さい」
聞いて一同の悪人が、くつ附いて見て來た譯ぢやアない

一回「そりやア御苦勞でした」

と祝ひの盃を擧げて川島の勞を犒らつた、扱て三百萬圓の財産を横領するに付いて邪魔だと思つて居る二人の中、若君が亡くなつて了へば、後に残るものは、忠義もの、妾の初枝、之れを退治して了へば既う此方のもの、悪黨の松崎が考へた、何うして退治てやらう、絞れば悪智恵と云ふものは出るもの、不圖思ひ着いたのは、自分と情を通じて居る奥方の龍子がお腹を痛めて生んだ御前の爲めには一粒種の今年三歳になる正文と云ふ坊ちやんがある、阿母さんが悪黨だからと云ふ譯もありますまいが、何う云ふものか、生れ落ちてから母親の龍子に懐かない、頻りに妾の初枝を戀しがる、で、お守の役が初枝、其處を附け込んで松崎が、可愛想ぢやが初枝の油断を見すまして、坊ちやんを搔つ凌つて來て、止めを刺して了ふ、預かつてお守をして居るのが初枝だから、無理から之れに謀殺の嫌疑をかける、旨く仕組んで警察にでも追ひやつて了へば、既う佐原家の財産全部は、其の暇に寝かすも起すも

此方の儘、考へて見りやア淺果敢な量見ですが、淺果敢な量見を出す位ですから、何うせ往生際は宜くない、併し之ればかりは現在母親の龍子と云ふものが目の前に居るんだから、相談を爲すに仕事にかゝる事は出来ない。

フシム或 日 の 事 奥方一人の奥座敷に

のつそり入り來る松崎家令

松「奥様」

龍「アラ、松崎さん」

松「今日は、奥様に御決心を願ひたい事があつて御相談に出ました」

龍「松崎さん、決心とは」

松「讀んで字の如く、心を一つに決めて頂きたいのです」

龍「心を決めると有仰いますのは」

松「我黨の事の成ると成らんとの境ですから、お氣の毒ぢやが正坊ちやんを諦めて

頂きたいのです」

熊「若を誦めろと有仰いますと」

松「無論、坊ちやんに罪も報ひもありませんが、お守をして居る彼の初枝を苦しめる爲めの手段として、坊ちやんのお生命を、松崎が頂きたいのです、如何でせう」

焼野の雉子夜の鶴の古い文句ですが、假令悪人でも親子の情は有る筈ですから、

夫れだけはと袖に縫つていも頼むかと思ひの外洒々したもので、

熊「エ、好うございます、子供なんぞは、之れから先、貴方との仲に拵らへて出来

ない事もないでせう、それよりも差し當つて欲しいのは三百萬の財産、生かすとも

殺すとも勝手に遊ばせ」

女も茲まで不貞腐つて來ると恐ろしい。

松「貴方が御承諾下されば、既う誰れに憚る處もない、夫れぢやア直ぐに仕事にかかりますから」

と云ひ棄て、立去る龍子の部屋、

フシハ話 は 茲 に 右 左

梅 の 家 と 云 ふ

茲は深川八名川町の片ほとり
怪し氣なる料理屋の奥座敷

差し向ひになつて居る二人の男、一人は家令の松崎、今一人は唐棧の素裕に、八反の三尺帯、頭の毛がモジャ／＼と生へ茂つて、眉と眉との間に及物で切つた古傷の跡、向ふ傷の熊造と云ふ悪黨仲間の腕ツ利き、

熊「ねえ旦那、お頼みと有仰るのは甚廢事で……」

松「爾うさ、お前を態々之れまで呼び出して相談をするんだから、今更ら堅氣になつて稼げの、親に孝行をしろのと、そんな野暮な事は云はんよ、實は人を殺して貰ひたいんだ」

熊「へエ、捨るんですか」

軍鶏と間違へてる。

松「何うだ、殺つて呉れるか」

熊「そりやアね、今度初めて遣ツつける仕事ぢやアなし、小遣錢に不自由すると、チヨイ／＼用ふる仕事で、殊に旦那は御最負の御得意様ですから、遣りませう、ですが、全體相手の代物は？」

松「屋敷に居る今年三歳になる正文と云ふ坊ぢやんだ」

熊「へエー、慘酷しい事をしますね、餓鬼まで捻るんですか、好うござんす、遣りませう、だが○は出ませうね」

松「何だ、そりやア」

熊「お金は」

松「馬鹿云へ。態々御前を見込んで頼む仕事だ、誰れが只だ働らけと云つた、出すよ」

熊「幾ら出ませう」

松「左様、先づ一箱だな」

熊「一箱と有仰ると千兩ですな」

松「爾うだ」

熊「冗談云つちやア不可ません、千兩やそこらでもつて、人の生命を取つたのは昔の相場ですせ、此の頃ぢやア處に依つてお湯錢だつて三錢になつてるぢやございませんか」

松「オイ／＼馬鹿なことを云へ、お湯錢と人殺しの相場が一緒になるか」

熊「だつて物の譬へが爾うぢやありませんか、もう少し何とかして下さい」

松「ム、それぢやア仕方がない、もう五百圓だけ奮然むとしやう」

熊「千五百兩ですな、私はね、五だとか七だとか云ふ半端な數が嫌ひなんです、もう少し何とかありませんか」

宛然物の賣買でもして居るやうな調子。

松「宜し、何にも云ふな。二千兩で手を拍て、それで行けなかつたら俺の方にも」
熊「エ、よ、宜うございます。ちやア夫れで受合ひませう、で、何う云ふ具合に遣
ッ、けるのですか」

松「今夜ね、夜中の二時頃までに、お前が兩國の橋の上で待つて居るんだ」

熊「又待つんですか」

松「良いから待つて居れ、伊藤さんかと聲をかける、之れが合言葉だ」

熊「ハ、ア成程」

松「お前が、ハイつて返事をする、搔つ浚つて来た坊ちやんを其處に置いて行く
から、それを自分の家へでも擔ぎ込んで、止めを刺したら、死骸を箱詰にして大川
へ投り込んで呉れ、それまでの段取が付きさへすりやア、此の不景氣にお前の懐中
に二千兩の金が飛び込むんだ」

熊「へエ、宜しうござんす、ちやア間違ひなく……」

と子供ではあれ人の生命を取る約束が白日の下に成り立つて二人の曲者は別れて
了ふ。

フシム金 龍山の鐘の聲

日はトツブリと暮れ果てたり

月も雲間を出つ入りつ

十時も過ぎて十一時

都大路の夜は更けて

茲兩國の橋上に、雨に濡れながら手を拱ぬいて人待ち顔の熊造

熊「もう來さうなもんぢやねえか、何をしてやがるんだ、又泣き出して來やがった
待呆け喰つて雨に濡れて、風邪でも冒きやア世話はねえ」

と零して居ると、橋の下り際の方から、バタ／＼／＼。

○「伊藤さんですか、其處にお出でになるのは伊藤さんですか」

熊「へい、伊藤ですよ、先刻からお待ち申して居りました」

○「ア、爾うですか」

「ア、爾うですか」

「ア、爾うですか」

「ア、爾うですか」

「ア、爾うですか」

熊「さ、此方へ来い」

若君はキヨロ／＼四邊を見廻して

正「小父さん、此處何處です」

熊「此處は俺の家だ」

正「此處何處です」

白の毛布にくるんである

急いで歸つた龜澤町の裏長屋

長屋が續て居る四五軒目ガラ／＼

熊「諄いなア、此處は地獄の一丁目と云つて、昔から、たと二丁目の無え處だ、何でも宜いから此方に來い」

引き寄せて、裏の戸締りを嚴重に、乃で取り出したのが石臼の臺、若君の胸倉を

擱んで、石臼の臺に腦天を當て、逆手に取つた出刃庖丁

熊「坊ちゃん、俺は向ふ傷の熊造と云ふ悪い事をして飯を喰つてる人間だ、或人に

頼まれて、今夜の中にお前さんの生命を取れば、二千兩の金儲けになるんだ、頼ま

れてする仕事だよ、俺を怨んぢや不可ねえせ、怨むんなら牛込の二十騎町、佐原様

の御屋敷に居る悪黨家令の松崎と云ふ男と不義をして居るお前の阿母を怨みなよ、

二千兩の金儲けだ、諦らめて死んで呉れ」

フシ／＼阿修羅の如き熊造が 振りかぶつたる刃物の下

無常迅速一呼吸 絳切れたりと思ひの外

事實は小説よりも奇なりと云ふ、下に居る若君が、何と思つたのか、振り下さう

とする機会に、可愛い眼付きをしてニコ／＼と笑つた、驚ろいたのは熊造、庖丁を
 疊に投げ付けて

熊「ア、驚ろいた、何と云ふ好い度胸だらう、成程、華族つてえものは、喰物が好
 いと見えて、子供ながらに度胸が据つてら、俺だつて一人前の悪黨だ、楯を突いて
 来る奴なら、例へどんな奴にだつて退けは取らねえが、今死ぬ間に、ニコ／＼と
 は何ちや、ニコ／＼ちや人は殺せねえ、だが考へて見りやア子供は神様だな、俺だ
 つて三十年も前にや、こんな罪の無え子供だつたんだ、旨え酒が飲みてえとか、變
 つた女が欲しいとか、考へたばかりに、到頭身體を汚して了つた、ア、もう一度
 子供になつて見てえな、俺はつく／＼悪黨が嫌になつた……」

「フシ／＼心の暗の雨晴れて 澄むや真如の月の影

熊「て待よ、悪黨の足を洗ふにしても矢ッ張り金だ、何うかして此の坊ちやんを助
 けて何うせ悪錢身に付かすだ、懲らしめの爲めに松崎の野郎から二千兩の金を取り

上げて、何處かへ行つて了ふやうな具合は無えかしら、オ、一軒隣りの土龍の虎
 俺たア兄弟分だ、度胸は無えが、小智恵のある野郎だ、彼奴に話したら片棒擔いで
 呉れるだらう、爾うだ、坊ちやん、俺は一寸なア、隣りまで行つて来るから、眠と
 して居るんだせ、既うお前さんのニコ／＼で恐れ入つたよ、決して悪い量見を出し
 やアしねえ、都合によつたら、お前さんの味方になつて働らいても上げやう、待つ
 て居なさいよ」

と云ひ棄て、戸外へ出で、一軒隣りの同じ長屋續き、

熊「虎居るか、兄弟居るか、泥棒居るか」

兄弟と泥棒を一緒にしてる。返事が無い、ガラ／＼、

熊「オヤ、返事が無え筈だ、家中は空つぼだ、ハ、ア夜逃げしやがつたな、道理
 で世の中が嫌やになつたとか、何處へ行かうかとか、覺れよかしの謎見たいな事を
 云つて居たと思つた、だけでも、俺に一聲かけねえ奴があるか、待てよ、何か忘れ

て行きやアがつたな。

暗を透して見ると、蒲團らしいものが一枚、

熊「何だらう」

近付いて見ると、真中の所が、うづ高くなつて居る、ヒヨイと刎ねて見ると、

熊「オヤ、之りやア萬吉（子供の名）ぢやねえか、怪しいな、夫婦が夜逃げするの
に、幾ら邪魔になるからたつて血を分けた餓鬼まで打つ棄つて行くとは何うしたん
だらう………オイ、萬公………手前だつて爾うだせ、父や阿母が何處かへ行つて了
つたのに、寝てる奴もねえぢやねえか、呑氣だな、オイ萬公………ア、之りや死ん
でるんだ、ア、嫌やだく、今夜位え子供に驚かされる晩はありやしねえ、華族の
坊ちやんはニコくで人を驚ろかしやがる平民の餓鬼は又人が悪いや、死ばつて、
人を驚ろかしてやがらア、ア、待てよ、頼まれた坊チャンが今年三歳だ、此の萬公
が矢ッ張り同じ年だ、誰れかの言ひ分ちやねえが、華族だらうと平民だらうと、裸

體にすりやア同じもんだ、べたッ、此の萬公を彼の坊チャンの替玉に使つて顔さへ
變へりや分りやしねえ、成程天道様は正直だ」

と妙な喜び方をして、萬吉の死骸を小脇に、飛込んで来た自分の家、もう善心が
崩して居りますから、慘酷しい事も出来ないが、目を閉つて滅多打に庖丁で叩いて
クチャク〜にして了つた、豫て用意の密柑函、

熊「オツと坊チャン、さ、此の着物を着るんだ、そして其方の着物を寄越すんだ」
着物と着物を取りかへて、手を曲げ足を折つて密柑函に死骸を入れて、荒縄をか
けた。

熊「さア坊チャン、之れからお前さんの味方だ、今から小父さんは一寸用足しに行
つて来るから、何處へも行かないで待つて居るんだよ」

と云ひ付けて戸外へ一足飛び出せば

セメ外は淋しき秋の雨

暗を縫ひ雨を冒して兩國の橋

中程からドブリン ヲシメ何處ともなく消え失せたり

風寒き隅田の川の下手より 漕ぎ上げて来る一艘の船

之れは築地水上警察署の巡邏船、二人の警官が乗つて居る、雨に濡れながら大川を上り下り、職務とは云ひながら、餘り嬉しくはない、ギイムコッソソ

巡査一寸待つて下さい、燈光を〜

差し出すカンテラ、流れて来た函が舷へピッタリ、顔見合せて、妙な獲物があつたと、持つて歸つた警察署、忘れると云つては、職務怠慢だが、小使ひ部屋に置つ放しにして、忘れるともなく忘れて、丁度七日の日は経つた、近藤と云ふ其の船に乗込んで居た警官が當番で只だ一人、机に向つて書き物をして居る處に、山本と云ふ頭の禿げた小使ひの親爺が、鼻を摘んで飛付けて来た。

小使「こ、近藤さん、大變でございます」

近藤「ど、何うしたんだ」

小「一寸見て下さい、私の鼻の先が黄色くなつちやア居りませんか」

近「馬鹿な事を云へ」

小「でも此の間大川から上げてお出でなすつた彼の函でムいます、此の二三日お天氣が續きますと、何だか知らズン〜〜怪しな匂いが致します、おう、彼の函を何日までもお預り致して置く様でムいましたら、孫と相談を致しまして警察の小使は止めると云ふ事に……」

近「コラ〜、餘計な事を云ふな、彼の函は云はれて思ひ出した、忘れて居つた、一寸持つて来い、調べて見るから」

小「あの、誰か持つて参ります」

近「誰がと云つて、お前が持つて来るのぢや」

小「あの、私しが」

近「五月蠅い」

小使ひは不性不精に自分の室から函を提げて來た。

小「フ、ン、之れでございます」

近「成程、妙な匂ひがするな、繩を解け」

小「誰が解きます」

近「當り前だ、お前が解くんのだ」

小「そりやア御無理と云ふものでございます、物指で度つて頂きたいので、貴方と

函の間が近いが、私と函の間が近いが」

近「そんな餘計な手数をかけないでも宜い、繩を解け」

小「ハイ」

フシム愚痴をこぼして繩を解く

近「序に蓋を取れ」

小「あの蓋まで……」

近「早く取れ」

小使ひ、蓋を取つて見て、

小「ヤアツ」

尻餅搗いて腰抜かす。

近「おう、之れは子供の死骸、慘酷しい事をした奴がある」

フシム折も折として牛込の

今を去る事一週間前

佐原正則の令息正文と云ふ若君が

身分ある人の令息故

來つた電話と子供の死骸が合つた

死骸の函を車に積んで

運び込んだるばかりで

警察より至急の電話

二十騎町の子爵華族

曲者の爲めに誘拐されて行方不明

嚴重なる搜索方を依頼すると

茲に警官打揃ひ

二十騎町の佐原の屋敷に

妙なことから奥方の

悪事露見の端緒は次回

第四席

フシム波 風 荒 き 荒 磯 に

誰れに見よとの操の色ぞ

枝は折れても根は枯れぬ

獨り生えたる男松
幾世變らぬ深緑

子供の死骸を其の儘、二十騎町の佐原の屋敷に擔ぎ込んで、奥方の検視を求め、事になつた、先づ應接室に通して、乃で奥方が泣の涙でそれへ現はれて、半ば腐つた子供の死骸に取り絶つて聲を惜しまず泣き入る様を見て、立會の警部巡查も他人事とは思はず、同情の思ひに打たれて居ると、最前から數多警官の背後に隠れて、緋の着物に緋の羽織、焦茶の烏打帽を驚擾みにして、餘念なく奥方の様子に目を付けて居た一人の刑事、

フシム之れぞ 杉 村 薫 とて

鬼神と呼ばれた名探偵

以前は新聞の賣子をして居た苦學生、妙な縁故から佐原家の主人子爵正則に引き立てられて、今では牛込の警察に奉職をして居る、職務を離れて佐原家とは恩顧の間柄、一同が悲しみの涙に暮れて居るに、一人つかくと進み出で、

杉「奥様、此度は飛だ椿事が出来致しまして、何ともお慰さめの言葉もございませぬ、併し不肖杉村が、奥様に伺つて見たい事がございませぬ、此の子供の死骸は果して奥様が御覽遊ばしてもお屋敷の若様の御死骸ぢやと御認め遊ばしますか」

フシム龍子は 涙の 顔を 上げ

龍「ハイ、自分のお腹を痛めましたものでございませぬ、若の死骸に相違ございませぬ、誰れがコンナ惨酷しいことをしたものでございませぬ、亡くなりましたものは幾ら悔みましても取り返しが付きませんが、早く此の子を殺しました犯人だけ、貴方がたの手で取押へて頂きたいものでございませぬ」

杉「ヤ、御道理です、併し奥様、之りやア私一人としての考へに過ぎませんが、御参考までに申し上げませう、此の子供の死骸は何う考へても、御屋敷の若様の御死骸ではないやうに思ひます」

龍「エ、そりや又何うして」

杉「仔細に御覽遊ばせ、若様が御屋敷から曲者に浚はれてお出で遊ばしたのは一週間前の事ではございませんか、之れ御覽遊ばせ、此の子供の頭の毛が、こんなに汚なく延びて居るぢやありませんか、こりや態と延ばしたのでなくて、髮床に遣る金がないから獨りで延びたと云ふ頭の毛です、それから之れを御覽下さい、もう腐つて居りますから、只だ見ただけではお氣が付かれませうが、此の耳の穴に一杯溜つて居るのは、之りやア垢です、お屋敷の若様はお風邪でも召すとか或は他の御病氣で久しく御入浴をなさらないやうな事はあつたとすれば格別ですか、左もない以上は、之りやア入浴をさしたくても、させる事の出来ない貧民の子供か何か

でなければ、コンナに垢が溜る筈もありません、それから、此の足の裏を御覽下さい、茶碗の欠片か何かで切つたやうな傷の跡が茲に二ツあります、お屋敷の若様は果して斯う云ふお怪我を遊ばした事がございましたか、奥様先づ御安心下さい、之りや多分お屋敷の若様の御死骸ではございません、此の犯罪の裏面には、何か一種の秘密が蟠つて居るやうに思はれますが、奥様のお考へは如何でございます」

フシ「際どい處で一本突込んだ 脛に傷持つ 奥方は

ハツと心で驚いた

兎に角お守をして居た初枝に、一應取調べる事があると云ふので、牛込の警察に同行した、

フシ「身に犯した罪は無けれど 思ひがけなき濡衣を着て

連れられて来た警察署

一先づ留置所に投り込んだ、流石に纖弱い女氣の、何うなる事であらうと氣を揉

んで居る間に、調べもなく二三日過ぎた、花の顔色腿せて見る影もない姿となつた、丁度四日目の事、留置所から引き出されて来た刑事部屋、見ると其處には顔馴染の杉村薫が待つて居る、

杉「ヤ、初枝さん」

初「まア、杉村さんちやありませんか」

杉「此度は飛だ御災難で嘸ぞお困りでせう、十分お察し致します、時に今日は此の杉村が職務を離れて貴方に秘密でお尋ね致したい事があります、ねえ初枝さん、之れは私と貴方との間の秘密ですが、貴方が二十騎町のお屋敷に御奉公なすつて以來、彼の奥様の龍子さんと云ふ方のお身持に付て、何か之れは怪しいとか、之れは苟くも華族家の令夫人の行ひでは無いとか云ふ特別にお氣の付かれたやうな事でもありませんか、若しあつたら、今度の事件を深く取調べるに付て大變参考となりますから、私までに密とお洩らしを願ひたいのです」

フシ「云はれて初枝は顔を上げ

初「杉村さん、貴方は何を有仰るのです、考へても御覽遊ばせ、御前様はアンナ御病氣におなり遊ばす、大事な若様は、今度の様に間違ひが出来て亡くなつてお了ひになりますし、何う云ふものでお屋敷にはコンナ災難が續くのでございませう、此の上もし大事な奥様の御身體に、萬一の事でもございまして、それこそお屋敷は暗となつて了ふぢやございませんか、奥様に限つてそんな落度杯云ふことのあるお方ぢやございません、そればかりは初枝から固く御受合ひ致します、妾の身は何うなりまして、もうお屋敷の爲めだと思へば決して怨みとは思ひません、其の事なら重ねてお尋ね致さないやうに願ひませう」

フシ「聞いて杉村感心して コンナ苦しい思ひをして

尙ほ奥方を蔭ながら 庇ふ心の可憐しさ

分つた、決して此の人は若君を殺さう杯と云ふ空恐ろしい量見を持つ人で無い、

いよ／＼こりやア奥方が怪しいぞ、

杉「分りました、或は私の言葉が過ぎたかも知れませんが、許して下さい、貴女が二十騎町のお屋敷を思つて下さるのも、私と思ふのも、其の情に變りはないのですから、まア氣を大きく持つてお待ちなさい、今に必ず貴女のお身の明りが立つて、お屋敷にお歸りなさる事が出来ませうから」と、

セメ「分れを告げて

フシ「話し變つて

一人の車夫を伴に連れ

佐原子爵の令夫人

其の儘牛込警察を立ち去つた
茲は上野の廣小路
出で、來つた貴婦人は

世間の手前、自分の手で殺した筈の若君に、墓參りを濟ませて、今谷中の墓地から歸る處へ、傍らの物蔭から突然出て來た杉村黨、

杉「ア、奥様ぢやございませんか」

龍「あら、杉村さん、何方へ」

杉「奥様こそ何方へお出でになりました」

龍「妾、若の墓參りに參りまして、今屋敷へ歸ります處」

杉「ア、申し忘れしました、先達ては飛だ御災難で、其の後一度お見舞かた／＼お尋ねをする筈でございましたが、種々公用が忙しかつたものでございますから、ツイ失禮を致しました、時に奥様、茲でお目にかゝつたのが幸ひでございます、一寸お耳に入れて置きたいお話がございますが」

龍「ハア、そのお話と有仰るのはドンナ事でございます」

杉「外でもございませんが、今日署の方で、初枝さんに逢ひまして……」

龍「あの、初枝に」

杉「ハイ、それが何です奥様、人間と云ふものは、幾ら知れないと思つて悪事を働らいても、矢ツ張り良心の苛責と云ふものはあるものと見えまして、もう全然顔形

は寔に了つて見る影もございません、余程精神に苦しみを包んで居る様に見受けられました、先づ彼の分では、若様を殺害したと云ふ様な事實を、彼の人の口から洩らすのも最う程遠い事ぢやないと考へます」

龍「まあ爾うでございましたか」

杉「それでね奥様、之りやア茲だけのお話ですが、彼の初枝と云ふ婦人がお屋敷に御奉公して、何年になるか知れませんが、今までの間に、彼の婦人の行状に付て、之れが不可ないとか、こんな事が何うも怪しかつたと云ふやうな、何かお氣付きの事はありませんか」

欺されるとは露知らず、

龍「爾うでございませぬ、初枝も女、妾も女ですから、女同志の口からこんな事を申し上げると何だかハシタないやうに聞えるかも知れませんが、お尋ねになるから申し上げるんでございますが、全く初枝位ひ嫌な女はございません」

杉「アハ、」

龍「屋敷に居ましても只だ御前様の御髭の塵を拂ふことばかり考へて居りまして、妾達何ぞの事はてんで、眼中にないんでございます、それに本人の口からは何時も生娘らしい事を云つては居りますが、彼れで却々屋敷に参ります前から關係をして居た男なんぞも随分あるらしいんでございますよ、昨年でございましたか、妙な破戸漢見たやうな男が初枝に逢ひたいと云つて、屋敷に尋ねて参りました、其の時なんかも、大勢の中で赤面をした事がございましたが、何しろ育ちが育ちでございませぬ、あんな女なんぞは一つ間違つたら、どんな事をするか知れたものぢやございません」

杉「ハ、ア、爾う云ふ事がございましたかね、成程」

フシ「彼の聲で蜴蜥喰ふかや山杜鵑」

人は見かけによらぬもの

杉「ア、有りがたうございました、それを伺つて大變参考になりました、時に奥様

奥様の御國は何方でございますかね」

龍「エ、妾の」

杉「ハア、奥様の御里方は」

龍「ハイ」

突然に聞かれた、

フシ、素性を洗へば藝妓上り

叩きやほこりの出る身體

グツと返事に詰つたが

龍「妾、田舎者です」

杉「ほう、田舎者と有仰ると、東京のお生れではございませんか、それでは地方の御同族からでも御縁組遊ばして、只今の子爵と御結婚をなすつたんでございますか」

龍「いえ、爾う云ふ譯ぢやございません、妾、百姓の娘でございます」

杉「そんな事がございますものか」

龍「イエ、眞箇でございます、丹波の國の園部の在に居ります野澤三平と云ふのが妾の父でございます」

杉「ほう、大變御遠方ぢやございませんか、丹波の園部の在、阿父様のお名前が野澤三平さんと有仰るのですな」

龍「ハイ、父がすつと前に矢つ張りお屋敷に御奉公して居まして、大變先代の御前様に御氣に入りで、その關係から、妾もお屋敷に出まして、只今の御前様のお世話を致す事になつたのでございます」

杉「あ、爾うでございましたか、オ、うつかりお饒舌をして、こんな處まで來ました、私、今日は非番ですから、淺草に居ります友人を尋ねるつもりで出かけて來ましたのですが、ちや奥様、之れで失禮致します、お氣をお付け遊ばして」
聞くだけの事を聞いて、龍子に分れ飛鳥の如く姿を消した……

龍「松崎さん只今」

松「ア、奥様お歸りなさい、大變お手間が取れましたね」

龍「餘まりくさくするものですから、今日は途中で、少しばかり歩いて來ました。するとね、途中で妙な奴に逢ひましたよ」

松「ハア、爾うでしたか誰に」

龍「ソラ、彼の苦學生上りの杉村と云ふ奴に」

松「ハ、ア、そうでしたか、何か貴女にお話でも」

龍「エ、知らぬが佛で、今日牛込の警察で初枝に逢つて來たが、良心の苛責に堪えきれないで、大變竄れて、もう其の中に若を殺したと云ふ白白をするだらうなんてそんな事を云つて居りました」

松「ア、爾う事がうまく運ばいよ、我黨萬歳ですな、外に何か」

龍「それから、突然に、妾の國を聞きましたよ」

松「え？、貴方のお國、貴女は何と云ひました」

龍「豈夫柳橋で左袂を取つて居て、鐵火のお龍と唄はれた阿葉摺れの果てだとは云はれないものですから、返事に詰つて了つて、巧く嘘を吐いてやりました」

松「嘘を、どんな嘘を」

龍「妾は田舎者で、丹波の園部の在野澤三平と云ふ水呑百姓の娘だとそう云つてやりました」

松「まア、何うしてそんな無鐵砲な嘘が吐けたんです、驚ろきますな」

龍「だつて、嘘も法使ぢやありませんか、何時も御前様が、丹波の園部から來て居た野澤三平と云ふ爺は大變忠義な奴であつた、其の中便りがないが、何うして居るであらうと褒めては思ひ出して、妾にお話を爲すつた事があるものですから、それがツイ耳に残つて居て、ペラ／＼と用ゐて了つたんで」

松「奥様、初めに初枝の事を云つて、貴方に氣安めをさして、又貴方の素性を調べる處を見ると、杉村と云ふ奴、却々味をやりますで、奥様、お互ひに油断が出来ませんよ」

セメ「其の儘飛び込む電話室」

豫て仲間の一人、以前警視廳の刑事を勤めて居た三谷熊彦と云ふ、何か宜からぬ事があつて失敗つた男、急ぎの用だと呼び寄せた、

三「松崎さん、何か急な御用で」

松「オ、三谷君、大變だ、實は如々斯う云ふ譯だ、君に頼む、御苦勞だが、君丹波の園部まで出かけて……」

フシ「耳に口當てヒソ〜話し」

三「宜しい、承知しました」と、

フシ「話しの折柄」

玄關先へ緋の着物に緋の羽織

フシ「茶の中折を阿彌陀に冠り」

ステツキ提げた一人の男

男「ア、御免下さい……何うも何だか勝手が違ふな……ア、御免下さい……何だか窮屈だよア……お取次を願います……冗談ぢやねえせ。」

フシ「畜生姿に化けては居るが」

羊の皮着た虎狼

箱根へ急ぐ汽車中で

忠義な家令の月岡を

杉崎俊夫に頼まれて

三千圓で受合つて

殺して逃げた破虎漢者

親が命けたる姓名の上に

蟒蛇小僧と肩書取つた牛五郎

松「さア三谷君、玄關に誰れか来たやうだ、君一寸出て見給へ」

三「誰れだ……オ、牛五郎」

牛「旦那……何うも暫らく……レコは居ますかい」

三「コレ静かにせんか、宜い處へ来た上れ」

牛「へえ」

牛五郎を連れて元の部屋、

三「松崎さん、牛五郎が来ました」

松「オ、牛五郎、何時歸へつた」

牛「エ、先生暫らく……實は昨日歸りました、彼れから中國九州と飛んで歩いてすつかり資本を切らしたもんですから、もう此方の餘熱も冷めた時分と思つて、

實は先生に後金の處を頂かうかと思つて、窮屈な格好をして参りましたが」

松「オ、爾うだつたか、そりやア宜く歸つた、後金は今直ぐに渡しても宜いが、

又一つお前に頼む仕事があるんだが、やるか」

牛「へえ、そりやアやりますよ、何うせ何方にしたつて、お金にさへなる事なら、

殺せと有仰りやア親でも殺しますよ」

松「馬鹿云へ、親を殺せとは云やアしない、今實は三谷君に頼んで居た處だが、お

前が歸つて呉れりやお前が宜い、直ぐに行けるな……」

牛「何處へ行くだね」

松「丹波の園部の在に、野澤三平と云ふ老ぼれの百姓が居るんだ、生きてるか死ん

でるか、其處が不明なんだか、お前之れから行つて、若し親爺が生きて居たら、

一寸耳を借せ……」

牛「へい、成程、へえ、宜しうございます……それで、何しろ文なしですか

ら、前の奴の後金だけは今日の中に御都合願ひたいんですが……」

松「宜し〜」

金庫から取り出す千五百圓、

松「さア改めて早く收へ」

牛「へい、確かに、ちやア直ぐに出かけますから」

松「頼んだぞ」

分れを告げて屋敷を出る、後に残つた松崎が、

松「さア三谷君、宜い處へ牛五郎が歸つて來たから頼んだやうなもの、彼奴仕事にかけては抜目はないが、少しでも金が懐中に入ると、又途中で氣が變らないとも云へない、此方は急ぐんだから、君一ツ念の爲めに、彼奴の跡を何處までも尾けてどんな仕事の仕つ振りをするか、最後まで見届けて貰ひたいもんだ、我黨の浮沈の分るゝ處だから、十分にやつて呉れ玉へよ」

三「承知しました」

セメ「牛五郎の跡を尾けて

フシ「最前 前から

身を潜めたる杉村探偵

ニツコリ笑つて打ち頷づき

まア之れからが、此方の仕事

見え隠れに急いだり

屋敷横手のポストの蔭に

二人の姿を見送つて

待てば海路の日和とやら

二人の跡を尾けて行く

善と悪とが三ツ巴

如何に活劇演じますかは次の段

丹波の國の園部の在り

第五席

フシ「杜鵑自由自在に聞く里は

茲は丹波の園部の在り

見れば風雅の荒ら屋も

野澤五平の表の方

旅の渡り職人見たいな、三十五六の男、素足に麻裏を突っかけて、何やら物に怯

えた様子、四邊を氣にしながら、

男「へエ、お頼う申します、野澤三平さんと有仰るのは此方ですかい……」

守ですかい、野澤さんと有仰るのは此方ですかい……」

酒屋に三里、豆腐屋に二里

竹の柱に茅の屋根

住めば貧しい瘦せ世帯

二三度聲をかけて見たが家からは返事がない。

男「ウム、扱ては留守だな、よし、親爺が歸つて来るまで待つて居よう」

と獨り言して、穿いて来た麻裏の土を叩いて腰に挟んで、のつそり家に這入る、傍らの押入れの中に身を潜めて、もう歸るか、今に歸るかと思を殺して窺つて居たが

釣瓶落しの秋の日は

とつぷりと暮れて蟲の音も

いと、淋しき畦道傳ひ

破れた布子に身を纏め

六十過ぎた一人の老人

老「牛之助の歸りが馬鹿に遅いが……何をして居るんぢやらう……既う日がとつぷりと暮れて了つたに、未だ歸らん譯はないが、併し感心なものぢや、花も咲かねば實も成らぬ枯木のやうな此の親爺でも、人間の乾物にしまいと思へばこそ、朝は早くから町に饅頭を賣りに出て、幾らかのお金を儲けて來ると、

「祖父さん寢酒を買つて來たから飲んでお呉れよ」

と云つて差し出して呉れる、親切ア、向ふ脛の痛いのと、孫の可愛いのは忘れられんと云ふが眞實ぢや……既う歸りさうなものぢや、嘸ぞお腹を空かして來るぢやらう、どれ湯でも沸かして置ませう」

圍爐裡の火をかき起し、櫓折りくべて湯を沸かし、孫の歸りを待つて居る處へ、

子「祖父さん、今歸つたよ」

老「オ、牛公か、よう歸つた〜、お前の歸りが餘り遅いでな、又町の小僧等と喧嘩でもして居るんぢやなからうかと心配をして、只た今、村外れの一本榎の側まで見に行つて歸つた處ぢや、オ、御苦勞〜、何うちや今日は商賣があつたか」

子「ア、遅くなつた代りに、お金が儲かつたよ」

老「幾ら儲かつた」

子「四十五錢お金か儲かつたから、祖父さんが嘸ぞ待つて居るだらうと思つて、何時も一合買つて來る處を、今日は二合にして來たよ、さあ飲んでお呉れよ祖父さん」

老「何？、祖父さんが待つてらだらうと思つてお金が儲かつたから、二合にして来た、ア、勿體ない〜、今も一人で云つて居た事ぢや、枯木のやうな此の老爺に、飢しい思ひをさせまいと思へばこそ、雨が降らうと風が吹かうと、朝は早くから商賣に出かけて呉れるお前の親切、十年前に死んだ娘のお霜が見て呉れたら、嘸ぞ喜ぶだらう、おつと、こりやあ此方の愚痴ぢや、云ふまい〜、さあ牛、菜葉雑炊の旨いのが出来てる、早く食つて今夜は既う早寝ぢや」

フシ草履を脱いで上に上り

孫が情の二合の寝酒

只だシヨンポリと顔見合はせる

空に澄み行く月の影

腸に沁む雁の聲

老牛、秋の夜は淋しいの！」

祖父がして呉れた夕餉の膳の箸を取る

食事も済んで圍爐裡の縁

秋の夜は次第に更けて

何處より何處の國へ鳴いて行くか

牛「祖父さん、祖父さんが淋しいなんて云ふから、又思ひ出したが、祖父さんに俺は聞きたいことがあるだが、眞實の事を教へて呉れるかい」

老「何？、聞きたい事がある、何ぢやい、突然に改まつて、尋ねたい事があつたら何でも教へてやらあ、本體どんなことが聞きたいのぢや」

牛「だつて祖父さん、それを聞くと怒るぢやないか」

老「何、滅相な、お前と俺との仲ぢや、何でも聞くが宜い、何が聞きたいのぢや」

牛「ぢやあ聞くがね祖父さん、私の阿父さんや阿母さんは、今何處に行つてるんだい」

老「え？、父や阿母あ、又お前はそれを聞いて此の爺を苦しめて呉れるのか、廣い世界に親があると思ふと、腹が立つ、此の爺のお腹から生れて来たと思つてりやあ間違ひはないと爾う云つて聞かしてあるぢやないか、其の事なら既う尋ねて呉れるな、折角飲んだ酒の酔が、もう一遍に醒めて了うわい」

牛「祖父さんが爾う云つてるから、私も聞かないで置かうと思ふんだけど、私は口惜しいよ祖父さん」

老「な、何が口惜しい」

牛「祖父さんの爲めだと思や町に商賣に行くのは何でもないけれども、饅頭を賣りに行く度に、町の小僧等が寄つて集つて、ヤイ牛公、手前にや父も無えだらう、阿母も無えだらう、牛公は大方木の股からでも生れて来たんだらうつて、大勢寄つて私を苛めるんだよ、だから、有るんなら教へてお呉れよ、よう祖父さん、祖父さんッたら宜いや、祖父さんが黙つてりや宜いや、教へて呉れないんなら、もう明日から饅頭を賣りに行くのは止した、ねえ祖父さん、宜いだらう」

老「夫れちやあ何かい、お前が町に商賣に出かけると、町の小僧が集まつて来て、牛公は父無し子、父も無ければ阿母もねえ、木の股から生れて来たんだらうと云つて冷笑かす……ア、ア、世間の奴は薄情なものちや、家の牛之助は、粹狂で町に

商賣に出かけるのちやあございませせん、此の老人に飢しい思ひをさせまいと思つて商賣に出かけて呉れます、蔭から老爺が手を支いてお願い致しますから、家の牛公だけは苛めないで下さいませ……分つた、よう分つた、聞くのは道理ぢや、尋ねるのは無理はない、昨日までも今日までも隠して置かうと思つて居たが、お前の因果な身の世話し、打ち明けて話をして聞かせるから、好う聞けよ」

フシ「廣い世界にお前ほど

因果なものが又あるか

思ひ出せば十年前

俺に一人の娘のお霜

老「十七八は嫁入りざかり婿取りだから、今にも似合ひ相當なものがあつたら、婿に貰つて老先きの面倒も見て貰はう、死水も取つて貰はうと、楽しみにして居るとな、或日の事お霜が……」

「阿父さん、神戸の紡績會社とやらへ女工になつて行けば、女には不似合なお金がどつちり儲かるさうで、家は貧乏世帯だから、二三年行つて稼いで來ませうか」

と云ふ優しい言葉、只た一人の娘を旅の空へ出したくはなかつたが、お金になると云ふ甘口に乗せられて、一人娘を旅に出したのが一生の誤り、成程な、行つた當座は月々澤山なお金を爲替にして送つて呉れるから、ア、有りがたい事ぢや、此の分ならお金も今に溜るだらう、娘も立派に出世をして歸るだらうと、お金の殖えるのと、娘の歸つて来るのを樂にして待つて居ると、丁度四月目位から、バツタリ便りがない、親と云ふものは馬鹿なものぢや、若しや旅の空で間違ひでもありやせんか病氣にでもなりやせんかと、朝な夕な御燈明上げて、神頼み、娘の無事を祈つて居ると、お霜が家を出てから一年振りのことぢや、突然に大きなお腹を抱えてお霜の奴が泣きながら歸つて来たのぢや、其の時ばかりは、今思ひ出しても腹が立つやらく惜しいやら、打て／＼打ち据へてやらうかとも思つたが、さあ其處が身は泣きよりぢや、全體何處の何奴に、そんな巫山戯た眞似をされて来た、相手は何處の男ぢやと聞くと、

「阿父さん面目ない、濟みません、實は東京から渡つて来た、伊藤牛五郎と云ふ若い人と好い仲になつてこんな身體になりました、腹も立つぢやらう、憎いとお思ひなさるだらうが、初孫の顔を見るのを樂しみに、何うか許して下さい」

と云ふ娘の頼み、孫と云ふ字に氣が折れて、まあ宜い哩、我田に水を引く譯ぢやないが、他所様の娘御にも無い例ぢやない、宜いから這入れ、何にも言はんと家に入れて介抱をして居る中に、生れ落ちたのが、牛、汝ぢや、處がな、其の伊藤牛五郎と云ふ奴は、普通の堅氣の人間で、も有つて呉れる事かい、そりやあ貧乏と云ふものは時の廻り合せぢや、人間梶棒に掴まらうと何をしやうと、決して恥ぢやあないが、性根の曲つた奴位仕方の無い奴はない、東京で人が伊藤と云ふ親からの姓を呼んで呉れないで、彼りやあ恐ろしい蛇鱗ぢや、人を喰ふ蛇鱗ぢやと、恐ろしい肩書を取つた、お前の親父はなあ………」

牛「私の阿父さんは何だ祖父さん」

老「お前の親父はなあ（指を曲げて）之れの親分ぢや」
牛「何だい、其の指を曲げるのは」

老「子供で分らんのは道理ぢや、お前の親父はなあ……人の物を只取つて逃げたり間違へば人の生命を取る恐ろしい泥棒ぢやわい……」

牛「違ふよ……、私の阿父さんは泥棒ぢやない……」

老「これ、これ大きな聲をするものぢやない、野中の一軒屋、人が聞かにやあいやうなもの、通りかゝつて人が聞いたら何と云ふ、彼の子供の親父は泥棒ぢやげな、彼處の家の奴は泥棒の片破れぢやと云はれたら、此處にござる先祖様のお位牌に申し譯がないわい、それを苦に病んで到頭娘は彼の世の旅立ち取り残された因果同志の固まりが……牛、汝と俺ぢや、併し世間の人が聞いたら爾う云つてやれ、俺の阿父さんは、東京の牛込、二十騎町に佐原様と云ふ立派な華族のお屋敷があるんだ、其處の家に御奉公をして居る、今にお金をどつさり儲けて、立派な身分に

なつて歸つて来るから、其の時に手を支いて謝罪なると、爾う云つてやれ、夫れも決して跡形のない話ぢやない、すつと前に、此の親爺が御奉公を申し上げて居て、大變御厄介になつたお屋敷、今度の御前様もお優しい方で、ちよいと下さるお手紙に、爺や、孫を連れて早く東京に出て来いよ、人間出世の場所は東京ぢや、孫も引取つて世話をしやると有りがたいお言葉、お前を毎日町まで商賣に出すのも、幾らかお金が残つたら、東京まで行くのは新橋と云ふ所まで切符を買つて、汽車に乗るんぢや、其の新橋迄の切符が二枚買へさへすりやあ、こんな田舎に淋しい辛い思ひをして居ないでも、東京のお屋敷に行つて、御前様にお絶りして、お前の身立つやうにしてやる心算ぢや、なあ、辛抱せえよ、爺の爲めだと思つて辛抱して呉れよ……これ牛、牛」

「フシ」晝の疲勞の出たものか 早やすやくと軒の聲

老「ア、無邪氣なものぢや、聞きたいと云ふ父や阿母の身上話は未だ済みも

しないに、もう寝て了つた、こんな可愛ひ孫を残してお霜も先にいきたくはなかつたらうに、それにつけても伊藤牛五郎と云ふ馬鹿野郎、心がらとて今頃は何處の監獄で臭い飯でも喰つて居るか、忘れやうくと思つても、縁に繋がつて居るだけに時々思ひ出させやがる……エ、又雁が鳴いて通る、此の家の棟だけは鳴かすに通つて呉れ、世の中に見棄てられた人間が二人居るのぢや、雁よ泣かして呉れるな」押入れの中で、最前から、残らず話を立ち聞いて居た件の男、夢ではないかと驚ろいて周章て、其の場へ飛び出して來た。

男「面目ない、阿父さん、濟まない」

老「誰れちやい、突然に、人の家の押入れの中から飛び出して來やがつて、面目ないが聞いて呆れらあ、汝や誰だい」

「フシムつくぐ」相手の顔を見て

老「オ、汝や見覚えのある牛五郎、さあ何しに來た、く、今も今とて虫が知ら

せるか、此の子に父や、阿母はと聞かれて胸一杯、さんざ泣かされて居た處ぢや、さあ出て失せ、普通ならな、オ、婚殿、ようお歸り、と手を取つて上座にも据へてやりたいのが人情、そ、その出來ない譯は其方の胸にちやんと覚えがあらう、さあ出て失せ、な、何しに來た」

老「阿父さん、全く面目ない、耻を云はなきや分らねえが、今阿父さんの話の中に
出た、二十騎町の佐原様のお屋敷の悪黨家令の松崎に頼まれて、丹波の園部の在、
野澤三平と云ふ水呑百姓が居る、行つて殺して來て呉れりや、褒美の金は望み次第と云ふ甘口に乗せられて、エ、宜うがす、先立つものは當節金だ、金にさへなる事なら、例へ親でも……親でも殺しますと云ふて、東京を出立たのが悪い辻占だ
丹波の園部の在、野澤三平と云ふ人が、十年前、神戸の紡績會社で好い仲になつて
子まで産ませたお霜の阿父さん、俺の鼻に當る人とは十年以來別れて居て、大勢の
悪黨に採まれて、世間をして、幾ら魂が腐つてるとは云ひながら、俺はすつかり

胸忘れして居た、腹も立つたらう、肉を引き裂いて食ひたいとも思ひなさらう
が今日限り牛五郎は改心をしました、何うか許して呉んねえ」
老「いゝや、騙されますまい、そ、その口で十年前にはお霜が生命まで取られ
たのちや、さゝ出て失せ、夜が明けたら其方の身體の都合も悪いぢやらう、此の子
が目を覺ますと又涙の種を蒔きます、さあ何うぞ孫の目を覺まさぬ中、表へ立ち去
つて下さい」

牛「それぢやあ阿父さん、何うしても許しては呉れませんか」

老「早く歸つて下さい」

フニ、争ふ聲に夢破ぶられし牛之助

牛五郎の手を取つて連れ出したる表口

若し小父さんよ

祖父さん苛めて下さるな

虫が知らすか血筋の糸
首にかけてたる縞の財布を取り出し
金が欲しくば上げませう
町で儲けた四十五錢の残りもある

必らず悪い量見出さ居して下さい

恥かしいが今東京で

他人の事とは思ひませぬ

云はれた時に牛五郎

許して呉れよ牛之助

思ひ出せば十年前

何處ともなく出奔した

私ぢや斯く云ふ牛五郎ぢやと

口まで出たが待て暫し

寧ろ他人で別れんと

我子の身體をしつかり抱き締めて、

牛「坊ちゃん、好く云つて下さつた、成程、お前さんの有仰る通り、私は泥棒です

聞けば私の父様も

大泥棒の仲間ぢやそうな

此の金持つて行て下さい小父さんと

悪黨ながらも親子の情

親は無うても子は育つ

其方の母御を振り捨て、

薄情極まる父親は

明けて云ひたさ名乗りたさ

茲で名乗らば後の嘆きを増すばかり

だが、お前さんの一言に感じて、今から屹度眞人間になります、それでね坊ちやん
お見受け申せば祖父さんがお一人、阿母さんが亡くなつて、行方の知れない阿父さ
んも餘り性質の宜い人ぢやないと聞きました、お前さんから、三人分の孝行をして
やつて下さいよ、それからね坊ちやん、貴方にお頼みがあるんです、私はね、そん
な悪い人間ですから、すうつと以前に子供と云ふものを持つた事があります、其
の子は今何處に居るやら、居所さへも分りません、親子の情と云ふものも知りませ
んそれでね、坊ちやん、お前さんの言葉に感じて改心をするんですから、坊ちやん
の口から一つ、此の小父さんを阿父さんと一言云つて見て呉れませんか、そしたら
思ひ置きなく行く處へ行けるんです」

牛之「だつて小父さん、阿父さんでもない人に阿父さんと云へやしないよ」

牛「爾うでせう、其處が願ひなんです、坊ちやんが大きくなつて、昔斯う云ふ事
があつたと思ひ出した時に、此の謎は解けます、ねえ坊ちやん、お願ひです」

牛之「ぢやあお父さんと云つたら、屹度小父さんは良い人間になるんだね」

牛「へエ」

牛之「ぢやあ云つて上げやうかでも極りが悪いな……阿父さん」

牛「有りがたうぢや坊ちやん、之れでお別れ致します」

セメ「涙を揮つて思ひ切つたる男の一念 其の儘急ぐ園部の警察署

十町餘り來ました頃に 向ふから

△「オイ、其處に行くのは牛五郎ぢやないか、牛五郎、待て」

牛「誰方です、こんな處で私の名を呼ぶ人は……」

△「俺だ」

フシ「近付いて來る洋服男」

牛「オ、貴方は三谷さんぢやないかね、何うして……」

三「松崎先生に頼まれた仕事を、どんな風に片付けるかと思つて、高い旅費を消費

つてお前の跡を尾けて来たんぢや、何うだ、仕事は済んだのか」

牛「三谷さん、東京を出立時には金になることなら、親でも殺しませうと云つて法螺を吹きましたが、現在自分の小倅と、阿父が並んで居るのを見ちや及物は立ちません」

三「エ、野澤三平とお前と何かい、多少の關係でもあるのかい」

牛「關係どころぢやあございませぬ、十年前、神戸にうろついて居た時分好い仲になつたお霜と云ふ女の親爺が野澤三平です」

三「エツ、眞實かい」

牛「誰れが粹狂に嘘を吐きます、私は既うすつかり改心しました、立派に迷ひの夢が覺めました、貴方だつて爾うですせ、餘計な事だと思ひなされるか知れませんが、以前は警視廳の探偵とか、刑事だとか云はれた方が、僅かの金に目が晦れて、財産横領杯に加擔して、末の榮えた例はありやあしません、茲でお目にかゝつたのが

何より仕合せ、さあ御一緒に参りませう」

三「一緒に行く」と云つて何處に行くのだ」

牛「悪黨が改心して行く處は極つてるぢやございませぬか、監獄の出店の警察までさあ御一緒に参りませう、假令生命は無くなつても、三日でも宜いから涼しい行ひをして、天道様を拜むやうな人間にならうぢやございませぬか」

三「フ、ム、之りやあ驚ろいた、實に意外だ、成程警視廳の探偵とか刑事とか云つて苟にも人の上に立つものが、悪事に加擔をして、末の榮えは例は無いと云ふお前の平凡な言葉が、今日は僕の胸を衝いた、好し、それぢやあ俺も行つてやらう」

牛「來て呉れますか、ア、有りがてえ、斯う云ふ事になるのも死んだ娘がさせる業でございませう」

三「オイ、際どい處で亡くなつた女房の惚氣を云ふ奴があるか、お互ひに生命がないぢやけか」

牛「惚氣る譯ぢやございません、生命がけは覺悟の前です」

三「併しノウ牛五郎、俺は之れまで來るのに、大變道を迷つて來たが、自首をして出ると、云つても、全體警察は何方なんだい」

牛「へい、向ふに微かに二つ火が見えませう、彼れが園部の町の入口ですから、彼處へ行つて、警察を聞いたら直ぐに解ります、私が道案内を致します」

三「オ、爾うか、ぢやあ爾うして呉れ」

先に牛五郎が立つて、背後から三谷熊彦がくつついて來る。

フシハ彼方に見上ぐる大江山

前に流るゝ里の小川

誰れが架けたか丸木橋

堰かれて流るゝ水の音

秋の夜長の月影は

次第くゝに雲に吞まれて眞の暗

土橋を渡つて先を急ぐ牛五郎の背後から、

三「オイ牛五郎、此の道に間違ひはないかね」

牛「へい、大丈夫です」

三「ヤツ……」

と牛五郎の脾腹の邊り。

牛「呀ッ、な、何をなさるのです、そりやあ酷い〜」

三「何が酷い、九分まで成功した我々の仕事を、貴様に邪魔をされて、打ち毀されて堪るものか、一人前の悪黨なら、貴様も往生際を清くしろ」

牛「ヒ、ヒ、人殺し、〜」

三「コラ、静かにせい」

振りかぶつて、最後の止めを刺さんとした一刹那、遙かの方より急ぎ足にて來かゝる一人、

三「オヤ、誰れか來やがつたな、好し、茲までにして置けば、後は野澤三平と、餓鬼を片付けりやあ宜いんだ」

止めを忘れて、川沿ひの堤を傳つて一目散……次第に近寄る彼の人影、

○「オイ、コラ、確乎せい、氣を確かに持て」

牛「人殺しだ」

○「解つとる、何者に斯う云ふ事をされた、我輩は東京牛込の警察に奉職をして居るものだ、何者に斯う云ふ事をされた」

○「オウ、間違つたら許して呉れ、お前は東京の者で伊藤牛五郎と云ふものぢやないか」

牛「ア、杉村さん、濟みません」

杉「ム、矢つ張り貴様は伊藤牛五郎だな、何者に斯う云ふ事をされた」

牛「ハイ、牛込の二十騎町のお屋敷、松崎と云ふ野郎に頼まれて、園部の野澤三平と云ふを殺しに来て、名乗つて見れば夫れは私の舅です、悪い事は出来ないと思ひ改心

をして警察へ行く途中、東京から尾けて来た、今の三谷と云ふ悪黨、私を欺して大事の秘密の洩れない様と、こんな目に合はしたんです、何うせ私は構ひません、子供と親爺を助けて下さい」

杉「ウム、爾うか、爾う云ふ譯なら、お前も介抱してやりたいが、親爺と子供が危急ぢや、今二人を助けて来て、夫れから介抱してやるから、苦痛を忍んで待つて居れ、そして牛五郎、野澤の家は何處だ」

牛「此の橋を渡つて、堤に傳つて一本道、古い榎が目印で、その向ふに見えます茅葺きの一軒屋、親爺と子供と二人切り、お頼みます」

杉「よし、分つた、待つて居れ」

セメ「一目散に暗を縫ひつゝ、駆出した

血潮滴たる短刀を片手に

三「ム、此家か」

話し變つて野澤三平の表

息せき切つて悪黨三谷

表の戸締りを密と開けて向ふを見れば、

フシハ行燈に丁字溜つて薄暗く

煎餅蒲團が只だ一枚

祖父と孫とが抱き合つて

早やすや／＼と熟睡の夢

勝手元の水瓶から一杯掬つた柄杓の水、

ガツクリ呑んで勢ひを付け、

プツ、燈火は消えて鳥羽玉の暗、先づ親爺から殺つゝけてやらうと、馬乗りに跨つ

て、仕止めて遣らんと構へた背後から、鬼神と云はれた名探偵杉村薫が、

杉「御用だッ」

と左の手首に捕縄をかけた。

三「え、何をする

する／＼と引つ張つて、捕縄をプツリと、戸を蹴破つて逃げ出す奴を、

待てえ／＼と一文字、

フシハ人は寝ねたり夜は更けたり

空に無心の月を浴び

園部の在の松並木に
生命をかけて争そふと云ふ

善と悪との兩雄が
此場の結局如何なるか一寸一息

第六席

フシハ榮華は實に春の花

朝に咲いて夕に散る

只だ手枕の夢の間よ

夜半の嵐に散る櫻

丹波園部在の松並木、月影を浴びながら善と悪とが生命がけの格闘、此の結局は暫らくお預りして、忠僕安田宗平が、生命にかへて、弟君の正義に危急を告げたので、自分の身は第二とし、兄君の正則を、精神に異状があると云つて座敷牢に入る。杯とは言語道断、家に蔓こる悪人共を退治してはねば、佐原家萬代の基礎は毀れて了ふばかりでなく、世間に面目を潰さねばならぬと、忠僕宗平の遺髪を携へてロンドンを後に歸朝した、歸朝はしたものの、悪黨辯護士の川島猛は、屹度、自分

を撃止めたと報告して居るに相違ない、死んだ筈の自分が、突然に歸つたと云つては悪黨共が、又どんな計略を廻らすか知れないから、暫らく姿を隠しながら、家の様子を探つた上で、兄上の窮状も救ひ、悪人共を退治てやらうと、大久保の二階を借りて下宿する事となつた、固より自分は隠してあるから、誰れも佐原子爵の弟君と知る者は無い、正義は、何うかして家内の様子を知りたいと考へた掲句亡き宗平の妻のお光、之れならば今日まで屢々屋敷に出入りをして居たので、別に怪しまるゝ事もあるまい、殊には宗平が自分の身代りに死んで呉れた顛末をも話さねばならぬと云ふので、使ひを遣つてお光を呼んだ。

フシメ 若様よりの使ひと聞いて 且け暮れ思ひ案じた我夫の
嬉しい便りが聞けるかと 可愛い子供の手を引いて
尋ね來つた下宿屋の

正義は、お光と宗太郎を自分の室に通す、お光は闕の外に手を支いて、

光「若様、能う御無事で御歸り遊ばしました」

正「おう、光か、好う來て呉れた、宗平にも種々心配をかけて濟まなかつたの……」

光「あの、お逢ひ下さいましたか」

正「ム、逢つたが……」

光「若様と御一緒には歸らなかつたのでせうか」

フシメ 一緒に歸りはしたなれど

お前の幕ふ宗平は

彼れ彼の床の間の桐の函

彼れに納めて遺髪になつて歸つたと

口まで出たが流石夫婦

親子の情愛を思ひ

涙と共に飲み込まる

併し幾ら隠さうとしたところで、一生隠し切れるものでない、夫れにしてもお光や悴の宗太郎に、嘆きの少いやう、力を付けさせやうと、正義は

「お前は忠義な亭主を持つて仕合せだ、私も宗平の爲めに生命を助けられたので、こんな嬉しい事はない、だがのお光、私が今、どんな事を云はうとも、決して嘆いては不可ないよ、そりやあ嘆くなと云つたところで、嘆かずに居られもしまいが、夫れでは宗平の言葉に反く譯だから……宜いか」

光「そ、それぢやあ若様、もしや、良人の身に變りでも……」

正「さ、其處ぢや、宗平は忠義な奴ぢや、私の家にな、悪人共が蔓こつて兄上を座敷牢に入れ、其の上、私や初枝が生きて居ては、三百萬圓の財産横領が出来ないと云ふので、悪黨辯護士の川島猛と云ふのをロンドンに遣つて、私を殺させやうと相談してのを聞いた宗平、私の身を案じて呉れるばかりに、西も東も知らぬ身で、ロンドンまで尋ねて呉れた親切、私は泣く程嬉しかつた、そりやあ猶豫は出来ない」と次の船で歸國する前日、ロンドンの町を案内して日が暮れて或る公園に來かゝると私を殺しに來た川島の拳銃で、私に代つて死んで呉れた、最期の際の宗平が、何

うぞ宗太郎を一人前に育て、下さいとの頼み、後の事は心配するな、必ず世話を爲るからと固く誓つて其の儘長の別れ、これお光嘆くのは無理はない、宗太郎も泣くな、お前達に嘆かれると、身代りにした私はどんなに切ないか知れん、此の腸を千斷らるゝやうだ……」

光「それぢや、川島と云ふ奴に殺されたのでございますか……虫が知らすか、立つ時に、何事も有仰らず、只だお屋敷の一大事、ロンドンにお在での若様の處まで行つて來る、若し萬一の事があつて、俺が歸つて來ぬやうなれば……と何時にない沈んだ言葉……」

正「それぢやお前にも知らせずに来たのか、ア、忠義な奴を惜しい事をした、悲しいのは道理ぢや、併し泣いてばかり居たのでは宗平の魂が浮かばれぬ、宗平は、私の家に蔓こつてる悪人の種子を絶たうと苦心して呉れたのぢや、お前の良人の敵は其の悪人共ぢやから、何うか私と一緒になつて、其の悪人共を亡ぼすやうに働ら

いて呉れ」

光「良人の敵を亡ぼすと申しますと」

正「オ、其處ぢや、宗平が暫らく旅に出て居るから、庭のお掃除を代つて致しませうとか何とか云つて、二日に一度か三日に一度、屋敷に出かけて様子をすつかり見て呉れないか」

フシ「お光は涙の顔を上げ

お家の悪人良人の敵

必らず調べて参ります

正「オウ爾うして呉れ、宗太郎、お前は之れから勉強して、豪い人になるのだよ」

宗「小父さん、阿父ちゃん何故殺されたの、既う歸つては來ないのかね」

正「ア、泣くでないよ、其の代り、小父さんがね、お前は大學校まで遣つてやるから、勉強して豪くなるんだよ」

正義は、何かお光に二言三言囁やいて、

正「それぢや何分頼んだよ」

光「ハイ」

別れを告げて歸る其の家、宗太郎を近所の家に預けて、身じまひ濟まして何氣なく遣つて來たのが二十騎町は佐原の屋敷

光「御免下さい」

裏口から聲かける、お政と云ふ仲働きの女の

政「オ、お光さんか、好う來ました、近頃頼と顔を見せないから、何うした事かと思つて居ました」

光「有りがたうございます、つい貧乏暇なしで、思ひながらに御無沙汰致して申し譯ござりません」

政「それに宗平さんも頼と顔を見せないものだから、二人で何處かへ參詣にでも出かけたかと話して居た様な事です」

光「實はね、良人が、暫らく九州の方へ行つて居るものですから、其の立つ時に、俺の留守には、俺に代つてお屋敷の庭掃除や何かして呉れと申し付かつて居るのでございませうが、つい留守だと勝手が出ましてね、今日はお詫びかたぐ、お庭の草でも撈らうと、お伺ひしたやうな譯でございませう」

政「さう、今日も奥様がお庭を御散歩遊ばして、大變草が生えたから、宗平が來なければ、お前達交代で撈つたら宜からうと申し付かつてやうな譯ですよ」

「ッシ、お光は心で喜びの之れが機會で

屋敷の様子も知れやうと 四邊に氣をば配られて

お庭掃除に取りかゝる

男「御免なさい、佐原様のお屋敷は此方でございますか」

玄關に來つた一人の男、紺の法被に紺の股引、靴足袋を穿いて、饅頭笠を右手に提げて居る、誰れの目にも立派な車夫としか見えない。

男「居ねえ筈はねえが、御免なさい、佐原様の御屋敷は此方でございますか……御免、御免」

續げざまに怒鳴つたので、女中が次の間から顔を出して、ジロ／＼と見て居たが女「車夫さん、そんな大きな聲を爲れちや困りますよ、其處に鈴があるぢやないかね、御用のお方は之れを押して下さいと言ひてあるぢやないの、玄關に立つて何と云ふ大きな聲を出すのだらう」

男「ヤア何うも濟みません、私は其の字が讀めねえので、へ、へ、へ、實は何でございませうか、お使ひで参りましたんでございませうが、お屋敷に松崎さんと云ふ家令がお出でございませうか」

女「甚麼用事なの」

男「誠に濟みませんが、兩國の伊藤さんからのお使ひだと云つてお呉んなさい」

男「茲に手紙を持つて参りやしたが、之れを直接に渡せと云ふ事で、へい」

女「一寸待つて居なさいよ」

女中は奥に来つて、松崎に此の事を告げると、小首を傾げて居たが、兩國の伊藤で思ひ出したのか、自身玄關に出て来て、

松「オ、お前は熊……」

男「ヤ、貴方が松崎さんでございませうか、少々密々でお耳に入りたい事があつて参りました……」

松「ア、爾うか、よし、お前の用件は分つて居るで、それ、過日の、彼の梅の家まで行つて居て呉れ」

熊「旦那、もう其の手には乗りません、既う二度も待ち呆け喰はされてるんですから、今日は貴方の出様によつちや、此の玄關に座り込んで、挺でも動かぬ覺悟で來たんですからね、へ、何とか罅を明けて下さいね」

松「そんな文句は何うでも宜い、ぢやあ庭の離座敷に案内させるから、一寸待つて

居て呉れ、今、奥に手の放せない用事があるのだから」

フシム連れられて來た中庭の

木立の中に建てられた

最とも風雅な四阿の中

熊「妙に種々なものを並べてやがるな、此の小ぼけな家にせえ之れだから、本家の方は詰らねえものを山ほども飾つてるぢやらう」

四邊に目を配つて居る、最前、車夫體の男を離座敷に案内するのをチラと見た庭掃除して居るお光、何の用事で車夫を中庭の離座敷に通すのか之りやあ怪しいと氣を付けて居ると、家令の松崎が、何か小さい伏紗包みを持つて離座敷に行く、扱ては二人の間に、何かの秘密話があるに違ひないと、

フシム密と忍んで植込みの

草除る様子見せかけて

耳を聳て様子を探る

僅か障子の一重外

窺ふも、有とも知らぬ二人の男

熊「へ、、旦那、吃驚しなすつたわらう、向ふ傷の熊造が、車夫に化けて來やうたあ、お釋迦様でも一寸氣は付くめえ」

松「晝日中、玄關に立ちはだかられては困るぢやないか、少とは考へるが宜い」

熊「そりやねあ、考へねえ事はねえが、旦那の方で逃げるから、何うせ破れるつもりなら間違ひねえ、約束の金を出せば宜い、僅か二千兩の金にケチでも付けて出さなけりや、一伍一什を打ち明けて、旦那を俺のお伴に連れやうと思つたのでごせえやす」

松「馬鹿を云ふな、お前の生命と私の生命を、同じ様に見られて堪るものか………時に、私の方でケチを附ける譯ぢやねえが、お前に頼んで殺つて貰つた若様の正文何うも人が違つてるやうだと云ふものだから」

熊「ジョ、冗談ぢやねえ、人違ひして殺す奴もねえもんだ、それとも旦那の方で、人違ひして浚つて來たら知らねえ事、俺や旦那の浚つて來た餓鬼を、仕事したまで

ぢやねえか」

松「おい、そんな大きな聲を出すものぢやない、壁に耳、障子に目の世の譬へぢや………」

熊「そんな事は何うでも宜いやね、それで旦那の方では何うと有仰るのです」

松「何うと云ふ譯ではないが、愈々彼れが若様正文さんの死骸だと云ふ證據を欲しいのだ」

熊「何ですつて、面白え事を有仰いますね、若様をお守して居る初枝と云ふ女、之をお屋敷から出して下はねば仕事が出来ない、それを出すには、お可愛想だが若様を殺して、初枝に罪を着せると有仰つて、若様を浚つて來たのぢやごせえませんかようがす俺は、二千兩は鏝一文も貰はねえ、彼の死骸が、若様の死骸であるか無いかは、知つてる人は知つてる筈だ、俺も此の世の飯の食ひ收め、善心に返つて見えても思つてるから、梅の家で頼まれた一伍一什を………」

松「オイ、熊造、お前は何を云ふんだ、馬鹿な事を云ふものぢやない、二言目には、お前は直ぐに自首する様な事を云ふが、誰れもお前に二千圓の金を渡さないとは云やあしない、斯うして、渡さうと思つて茲に持つて来てはあるが、話は話で爲て置かぬと不可ないからの」

熊「ぢやあ、素直に渡してお呉ねえ、それさへ貰やあ四も五もねえんだ」

フシメ流石悪黨の松崎も 今更ら熊造に荒立てられりや

多年の謀計水の泡 癩癩に觸るが仕方がない

熊「ぢや茲で渡すが、念の爲めに聞いて置くのは、豈夫、改心をして、詰らぬ事を饒舌りやあしまいね」

熊「へエ、改心をして、悪い事は爲ないやうになつても、生命は惜しうごせえますから、其の邊だけは御安心なすつて居なさるが宜い」

松「爾うか、お前も悪黨仲間では、少とは人に知られた男だから、満更ら嘘でもあ

るまい、ぢやあ茲に二千圓、約束通り渡してやるから、改めて受取つて呉れ」

熊「へイ、確かに二千兩」

熊造は松崎から受取つた二千兩と腹掛けの袋に押し込んだ、最前から植込みの中に潜んで、二人の話を残らず立ち聞いて居たお光、聞く事毎に驚ろき恐れ、之りや此の儘に打ち棄て置いたら、お屋敷は今に眞の暗となるであらう、悪人の張本は松崎と云ふ家令、初枝さんを追出さんばかりに正文若様を亡さものになさんと計つた恐ろしさ、それにしても彼の熊造と云ふ男は、何處に家を持つて居るだらう、夫れを一つ突き止めて、若様にお知らせして置けば、何かの爲めになるであらうと

フシメ足音忍んで植込みを 出で、來つた彼のお光

泉水縁を一廻し 風致を添ゆる石燈籠

松の樹蔭の下に出で 母屋を廻つて裏口の

光「今日は少し用事もありませんれば、之れで失禮致します、明日は早くに参りまし

て、お庭掃除は済ませますから……」

政「早いぢやないのお光さん、今直ぐに御飯も出来ますから、久し振りに夕飯でも済まして歸つたら宜いでせう」

と云ふのを後に聞き流して、お光はすたくくと佐原の屋敷を出でた。話し變つて向ふ傷の熊造、巧々松崎を口車に乗せて二千圓の金を受取り佐原の屋敷を立ち出でると、見え隠れに尾いて行くお光、

熊「馬鹿な奴だ、案外意氣地の無え野郎だ、三百萬と云ふ大身代を、横領しやうとする位の悪黨なら、も少とは性根が据つて居さうなものぢやが、ヘッへ、」

獨言ちつゝ歸り來つた龜澤町の裏長屋、

正「小父ちゃん」

熊「オ、泣かずに遊んで居なすつたか、好い子だね、ア、近所の子供が好く遊ばして呉れると見える、さゝ坊ちゃん、家へお這入り、好い子だ、今日は小父ちゃん

坊ちゃんに好い物買つて上げやうな」

一度は殺さうとまでした若様正文、不圖した事から、熊造は改心したが、隣りの死んだ子供を替玉に使つて、何うせ悪黨共の金を絞るのだからと、其處は何うしてもお里が現はれるもの、二千圓を懐中して歸つた熊造は若様を抱き上げて、何やら呟やいて居る表の方、

フシ「怪しい男と後を尾けた彼のお光

密と様子を探ふたり

セメ「目敏く眺めた熊造は

己れ誰だと飛鳥の如く

お光目蒐けて飛び着いたり

光「あれ、放して下さい、怪しいものではございません」

熊「人の家を覗く奴に、怪しくない奴は無い、己れ掻つ浚ひか、空巢狙ひか、泥棒ぢやらう」

何方が泥棒か分つたものぢやない、

光「イ、エ、決して怪しいものではないです」

熊「吐くな、太え阿魔だ」

セメムと襟髪掴んでズル／＼

フシム脛に傷持つ熊造が

避けんと藻掻くお光の身體

捕はれました小兎か

如何なるかは次の段

怖さに狂ふ鐵拳を
哀れお光は荒鷺に
虎狼の牙にかゝつた羊も同様

第七席

フシム心からよこしまに降る雨

風こそ夜半の窓は打つらめ

お光は、佐原家の弟君、正義に頼まれて、佐原の屋敷内の様子を探る事となつた最初の日、端しなくも中庭の離座敷で、家令の松崎と、向ふ傷の熊造の話を盗み

聞きしたので、其の悪黨の熊造の居所を突き止めて置きたいものと、女でこそあれお主の爲め、殊には可慕しい良人の敵の片破れと思ふ心から、熊造の後を尾けて、其の隠れ家まで遣つて来て、中の様子を窺つて居ると、飛鳥の如く、躍りかゝつた熊造の爲めに取押へられ、今や拳の雨の降らんとした一刹那、

フシム此の様眺めた若君の正文は 小母ちゃん／＼と駈け寄つて

引き倒されたお光の上に轉がりたり

熊造は、怪しい奴だ、自分の後を尾けて来た奴だと思ふから、殴り付けやうとしたのを、正文が其の上に轉がり寄つたから、拳固の持つて行き處がない。

熊「エツ」ポカリ傍らの柱に打つ付けた。

熊「オ、痛え、何てえ固え柱だらう」

豈夫そんな事はありませんが、拳を固めて、まご／＼して居ると、引き摺られて居たお光、今「小母ちゃん／＼」と駈け寄つた子供の顔を見て。

光「オ、貴方は若君様ではございませんか」

正「小母ちゃん、小父ちゃん、小母ちゃん打つちや嫌や」

フシ「幼な心に片言まじり 紅葉の様な手を上げて

お光と熊造の中に入る

熊「ヤ、ヤ、様子が變になつて來たぞ、手前は此の坊ちゃんを知つてるのかい」

光「ハイ」

熊「知つてる以上は、益々生かしちや置かれねえ」

セメ「観念せよ」と 固めた拳固丁々々

小父「嫌くと泣き出す正文 お光は正文を抱き上げて

光「暫らくお待ち下さい、詳しく様子を申し上げますから」

熊「そんな事を云ひやがつて、汝、逃げ出さうたつて逃がしはせぬぞ」

光「滅相な、決して逃げ隠れは致しません、それに付けても、若君様の此處に生き

て居られるのが何より不思議」

熊「オ、其の不思議は當然ぢや、手前の方に嘘が無けりや、俺の様子は語つて聞かせる、一體何でこんな處まで尾けて來やがつたんだ」

光「其のお不審は道理でございます、若君様の生きて居られるのが何よりお喜ばしい事、實は、妾は佐原様のお屋敷に、御恩になつて居る出入りの者、妾の良人は、お屋敷に悪人共が蔓つて、三百萬の財産を横領せんその爲めに、御前様を座敷牢に押し込め、弟君の正義様が、英國のロンドンに在るのを、殺させやうと悪人を、ロンドンに遣る下相談して居るのを、良人が聞きまして、之れはお屋敷の一大事、棄て、置いたらお屋敷は暗になると、六百圓の貯金を持つてロンドンとかへ渡りましたが、却つて悪人の手にかゝつて殺されて了ひました、妾は夫れが口惜しさ情なさ、切めては他家ながら、悪人共に敵打がしたい爲め、又一つには、今日まで、御恩を受けた御屋敷に、御恩返しを爲たいばかり、今日お庭掃除に出かけ居ると、

貴方と家令の松崎様、何だか様子が怪しいので、忍んで聞いた一伍一什」

熊「ヤ、それでは彼の話を……」

光「ま、待つて下さいませ、其の話の様子では、若君様の御毒を、亡きものにしたとの話、それに斯うして居らるゝのは？」

熊「ア、豪え、何うして皆な世間の者はそんなに豪えのだらう、何かいお前の亭主は、若様の身が危険えてんで、六百圓の自腹を切つてロンドンとかへ出かけ、若様の身代りになつて死んだつて、それでお前が……ア、俺は悪かつた、俺は他人の金が欲しいので、他人を殺さうとまでしたのだ、お前の亭主は、他人の生命を助けてやうが爲めに、自分の金を使つて生命までも主人の身代りになつたてんだな、アア俺が悪い、く、俺は既う何にも云はれねえ、コ、堪えて呉んねえ……だがの、此の坊ちやんを殺して呉れと頼まれて、引受けながら他處の死んだ餓鬼を身代りに使つて、坊ちやんのお生命を助けたのが切めてもの罪亡ぼしだ、おい、姐御、俺は

すつかり改心した、改心しても先立つものは金だと思つて、今日二千兩、松崎の野郎から取つて来たが、お前の今の言葉を聞いて、金なんざあ要らねえや、お前も亭主を殺されて口惜しからう、敵打ちするなら俺も何かの役に立つて遣らう、之れから、此の坊ちやんを何處へなりともお前の好い處へ連れて行つて呉んねえ」

フシム人の性は元は善なるものよ

雲の障りは假令あれど

如何でか暗に了らんや

無明の暗も真如の月も

悟り來れば裏表

オ、熊造さんとやら、能く云つて呉れました、妾の良人はお屋敷の爲め、生命を捨てたのでございます、それに繋がる妾、お屋敷の爲めには生命を惜しむものではござりませぬ、貴方の今の一言が、眞實に御改心なされたのでしたら、之れから後は、何うぞ妾達の力になつて、何かの折に、お骨折を願ひます」

熊「ア、宜いとも、何うせ一度はお年貢を納めねばならねえ身體だ、過日も、此の

坊ちやんが、今自分の殺されるのだとも知らず、ニコ／＼笑つたばかりに、何うやら迷ひの夢の覺めかゝつて來た處へ、今日お前が、身を棄て、忠義をしたと云ふ、お前の亭主の話を聞いて、俺は堪らなく悲しくなつた……同じ人間に生れて何うしてこんなに変るものだらう、此の坊ちやんが俺の手に渡つたも、お前が俺を尾けて來て、斯う云ふ話を爲るのも、皆な何かの因縁かも知れねえ、のう姐御、勘辨して呉んねえ、向ふ傷の熊造、生れて今日まで四十六年、随分慘酷たらしい仕事もしたが、心の咎めで涙を出したのは今日が初めてぢや」

光「眞實に何かの因縁でございませう……ぢやあ若様は、妾がお連れ申します……若様、参りませう」

正「小母ちやん、何所へ行く？」

光「……妾と御一緒に参りませう、併しね、幾ら華族様の若君でも、今はお屋敷に悪人が蔓こつて、若様のお生命を取らうとする、恐ろしい鬼が居るのでございま

すから、お屋敷には歸られませんよ、ねえ、若様妾と一緒に参りませう」

お光は、初めて抱いた若君の正文、熊造に分れを告げて、龜澤町を後にやつて來たのが大久保の正義の下宿、實は如々斯々と、有り次第を物語ると、正義は昵と何事か考へて居られたが、

正「ウム、お前の働らきは天晴れぢや、正文は暫らくお前の手許に預つて呉れ……爾う聞いては既う一刻も猶豫する場合ではない」

正義はお光の話を聞いて、顔色を變へて憤つた。茲で話しは二つに分れる。

フシム甘騎町は佐原の屋敷の奥座敷 集まる悪人松崎家令を初とし

悪黨辯護士川島猛 類を以て集つた同志の面々八人

松度々皆様にお集まりを願はうやうぢやが、我々同志の事業も、既う九分九厘まで成功したと云ふものぢや、愈々事成つた曉は、皆様に満足するだけの分配も出來やうと思つて居るが、只今牛込警察に引致されてる初枝ぢや、彼れは警察の方で

少と手酷しく調べて呉れりや、根が柔順なお屋敷思ひの女ちやから、何うにか片が付くだらうとは思ふが、海の物とも山の物とも分らぬのは弟君の正義さんちや、そりやあ、川島君が態々ロンドンまで出かけて、確かに手應えがあつて引き上げたといふのぢやから、間違ひはなからうが、夫れにしても、佐原正義が狙撃されて相果てたと分つたなら、何とか先方から照會のありさうなものぢやが、皆さんは何う思ひます」

川「ぢやあ何ですか、松崎さんは、私がロンドンで、仕事をしたと云つて報告したのを、嘘だと有仰るのですか」

松「イヤ、爾う有仰られては困りますが、皆様と一緒に、之れまで仕事をして来たのぢやから、萬全を期する爲めに、如何なる手段方法を講ずるが宜いかと云ふ事を御協議に預りたいのですからね、そりやあ勿論、正義さんは亡き人になつて居やうが、何等の沙汰のないのが怪しいと思ふのぢや、そこで、今後更らに如何なる手段

を講ずるかと云ふ事を、皆様の御意見を承はりたいのです」

中庸に座つて居た川島猛、

川「私は、兎に角、松崎さんの使命だけは果して来たのですから、此の上は、最後の問題に立ち入つて頂きたいものと思ひます」

松「最後の問題と云ふと？」

川「御當主は、精神病で、到底佐原家の御支配は出来ません、當然御家督をお譲りになる若君正文様は、アンナ不慮の御災難で御他界遊ばされる、ロンドンの正義さんは、那麽事になされたのですから、此の上は、佐原家の萬事は、奥方の心のまゝになる事と存じます、其の奥方を自由になさるのは松崎さんより外にありません、最初の約束を速かに履行して頂きたいものと存じます、皆様、如何御考へです」

フシ「何れ劣らぬ甘みに集る蟻の同勢

私も賛成私も同意

川島猛の發議によりて

成程左様で可決する

バ タ く く く

遠くに騒ぐ男女の聲

松「ヤ、又御前様が暴れ出したらしい、困つたものだ、鹽澤さん、貴方少と睡眠劑か魔睡藥か飲まして下さい」

鹽「爾う薬ばかり飲ましてちや宜くありませんがね」

松「ちやあ何故初めから相談に乗つたのです、構はぬから、少と多量に飲まして、成るべく長く静かにさして下さい、あんなに騒いぢや五月蠅いから」

正則「龍子、龍子、龍子は居らぬか、何故出て来ない、何故私を苦しめる、松崎を呼べ、松崎を呼んで、不都合の事をするよ承知せんと云へ、おい龍子、龍子は居らんか」

龍「アレ、御前様、妾は茲に居ります、又御氣分が悪いやうにお見受け致しますお静かに遊ばせ」

正則「馬鹿、静かにする事はない、貴様等は何故私を爾う邪慳にする、私を何故一

室にばかり入れて錠を卸すのぢや、松崎、松崎」

松「ハ、ツ、御前様、何うぞお静かに遊ばせ」

正則「馬鹿、貴様達が矢笠しく云ふやうにするから私は矢笠しく云ふのぢや、何故自由にさせん、馬鹿なツ」

龍「松崎さん、又御病氣が起つたのですから」

松「爾うでございますね奥様、如何致しませう」

龍「鹽澤が居るでせう、薬を飲ませるやうにしたら宜いでせう」

正則「何？薬を飲ませる、馬鹿を云へ、病氣で無いものが薬を飲む必要はない、お前達が寄つて集つて何を爲るか分つたものぢやない、初枝を呼べ初枝は居ないか」

龍「御前様、初枝は既うお屋敷には居りません」

正則「何、初枝が屋敷に居らん、誰れに許しを受けて暇を出した」

龍「御前様、御前様は何にも御承知遊ばしませぬが、初枝は恐ろしい女でござりま

す、若の正文を殺したので、只今牛込の警察に拘引されて居ります」

正則「何？馬鹿を云へ、馬鹿なッ、そんな初枝ぢやない、彼女は忠義な奴ぢや、お家の爲めを思つて働らいて居た奴ぢや、私を一室に入れて置いて、初枝を遠ざけるとは不埒だ、若を連れて来い、正文を連れて来い」

正則は、家の者が、拘束を加へるので、自然に神経が昂ぶつて行く、扱ては手當り次第に道具を取つて庭に投げ付けた。

フシマ後 控へた松崎は 見るに見兼ねて鹽澤醫師に目くはせる

鹽澤醫師は、此の儘に放任して置くと、精神が益々昂ぶるばかりだと云ふので、無理から何やら薬を正則に飲ませると、流石に猛つて居た正則は、暫らく経つと静まり返つて、夫人の龍子に手を取られ、例の座敷牢に導かれると、設けの寢臺に横はつたまゝ、そのまゝスヤ／＼と眠つて了つた。龍子は、松崎等の室に来ると

「鶴何うも皆さん御苦勞です」

松「奥様、御心配でございませう、今日は大分長かつたやうでございませうね」

龍「エ、皆様がお出で下さつたから爾うでもありませんでしたが、何か夢でも見たものと思へまして、急に飛び起きて、室中を狂ひ廻りながら、丹波の園部から、野澤三平が孫の牛之助を連れて来るから、之れへ通せの弟の正義が、今ロンドンから歸つて、玄關に逢ひに来てるから、早速連れて来い」と云ふのでせう、何方も既う此の世には生きて居ない筈の人ばかりでせう、妾、何だか氣持が悪くなつて仕方がなかつたのですよ」

松「何？丹波の園部から野澤三平が……それにロンドンから弟の正義が逢ひに来たと……ハ、ア、血と云ふものは恐ろしいものです、御前様が、始終正義様の事を御心配遊ばして居なすつたでせう、それが、今度愈々斯うなつたのですから、正義さんの魂も、御前様に逢ひに来たものかも知れませんよ、野澤三平は、御前様の大的お氣に入り、彼奴は百姓に似合はぬ忠義な奴、何れは家に引き取つて

世話を^{せわ}見てやると有^あ仰^{おほ}つて居^ゐたものですから、之^これも最^{さい}期^きの呼^い吸^きが通^かつたものと見^みえまする」

フシメ夢^{ゆめ}は逆^{さか}夢^{ゆめ}とは能^よう云^いふた

何^{なに}も心^{しん}配^{はい}無^む用^{じよう}でござる

龍^{りゆう}爾^にうかも知^しれないわね、何^{なに}しろロンドンから日本^{にほん}まで、幾^{いく}千^{せん}萬^{まん}里^り隔^へて、居^ゐるのだから、兄^{あやうだい}弟^{だい}といへば案^{あん}じるのも無^む理^りはないでせう」

松^{まつ}「時^{とき}に奥^{おく}様^{さま}、最^{さい}前^{ぜん}から茲^{こゝ}で種^{いろ}々^く相^{さう}談^{だん}して居^ゐるのですがね、然^もう我^{わが}黨^{たう}の仕^し事^{ごと}も、九^く分^{ぶん}九^く厘^{りん}、十^{じゅう}分^{ぶん}と云^いつて差^さ支^しえな^いま^でに成^{せい}功^{かう}して居^ゐるのですから、骨^{ほね}を折^をつて頂^{いた}いだ皆^{みな}様^{さま}に、約^{やく}束^{くわ}の物^{もの}を配^わける様^{やう}にと云^いふことですが、如^{いか}何^{なに}なものでせう」

龍^{りゆう}「それは、私^{わたし}も、夙^{むつ}くに承^{しょう}知^ちして居^ゐるのですよ、今^{こん}度^どは皆^{みな}様^{さま}の骨^{ほね}折^をりで何^{なに}うやら仕^し事^{ごと}も出^で来^きましたから、早^{はや}くお談^{だん}をしやうと、考^{かん}へてるのですけれど、丹^{たん}波^はに行^いつて居^ゐる三^{さん}谷^{たに}さんが歸^{かへ}つて来^こないでせう、之^{これ}れも、松^{まつ}崎^{ざき}さんの世^せ話^わで、牛^{うし}五^ご郎^{らう}を遣^やり其^{その}の上^{うへ}に三^{さん}谷^{たに}さんを遣^やつたのですから、萬^{まん}が一^{いち}にも間^ま違^{ちが}ひのあ^あらう筈^{はず}はありません

が、三^{さん}谷^{たに}さんは初^{はつ}めから一^{しつ}生^{せい}懸^{けん}命^{めい}心^{しん}配^{はい}して下^{くだ}すつた方^{かた}ではあるし、三^{さん}谷^{たに}さんの居^ゐな^い内^{うち}に、皆^{みな}様^{さま}に配^わけると云^いふのも、何^{なん}だか變^{へん}なのですから……併^{しか}し明^あ日^{じつ}か明^あ後^ご日^{じつ}の中^{うち}には歸^{かへ}りませうから、内^{うち}輪^{りん}の者^{もの}の集^{あつ}まつた處^{ところ}で、影^{かげ}日^ひ向^{むか}なく配^わけた方^{かた}が宜^{よろ}からうと思^{おも}つて居^ゐるのですよ」

フシメ流^{なが}石^{いし}柳^{やなぎ}橋^{はし}で

鐵^{てつ}火^{くわ}の龍^{りゆう}と呼ば^よれたる豪^{ごう}の者^{もの}

立^{たて}板^{いた}に水^{みづ}を流^{なが}すの辯^{べん}舌^{ぜつ}で

淀^{よど}みもなくに述^のべ立^たつる

聞^きいて居^ゐた連^{れん}中^{ちゆう}も、云^いはれて見^みれば其^{その}の通^{とほ}り、此^この席^{せき}には三^{さん}谷^{たに}熊^{くま}彦^{ひこ}が居^ゐない、一^{いっ}緒^{しよ}に仕^し事^{ごと}をしたのであるから、其^{その}の人^{ひと}の留^る守^しに利^り益^{えき}配^{はい}當^{たう}に預^{あづか}ると云^いふのは何^{なん}だか變^{へん}なものであると、惡^{あく}黨^{たう}同志^{どうし}でも、惡^{あく}黨^{たう}は惡^{あく}黨^{たう}の情^{じやう}義^ぎがあるものと見^みえる、兎^とに角^{かく}、明^あ日^{じつ}か明^あ後^ご日^{じつ}には三^{さん}谷^{たに}も歸^{かへ}る事^{こと}であらうと其^{その}の歸^{かへ}りを待^{まち}つて其^{その}の日^ひは分^{わか}れる。

フシメ其^{その}の日^ひも暮^くれて明^あけの朝^{あさ}

一^{いち}味^みの惡^{あく}黨^{たう}は

今日^{けふ}は三^{さん}谷^{たに}が歸^{かへ}る日^ひと

ぞろぞろと佐^さ原^{はら}の屋^や敷^{しき}に詰^{つめ}かける

處が、其の日を待ったが歸つて來ない、何うした事かと案じて居ると、

フシム釣瓶落しの秋の日は 早や西山に春づいて

何處で撞くか暮れの鐘 落葉誘ふて降る時雨

バラくくくと通り行く

松 今日歸らねば明日は歸らう、最う出かけて一週間になるのだから、そんなに手間のかゝる筈はない、歸り次第に直ぐ知らせるが？、其の時は改めて寄つて頂きた

松崎の言葉に集まつた悪黨共は佐原の屋敷を立ち歸らんとする折柄、

セメ周章しく俥で駈け着た一人の男 梶棒下す間も待たず

フシム見れば吃驚コハ如何に 奥の方へ駈け入つたり

拳銃の煙と消た筈佐原子爵の弟君 川島辯護士がロンドンへ
並居る面々呀とはかりに 仰天なし

第八席

色を失してコソく逃げる
兄の正則との對面から
奸智に長けた家令松崎相手に
一寸一息入れまして次の段

茲に佐原正義が乗込
妖婦の龍子
如何なる活劇演ずるかは

フシム人生は朝露夕電

秋の夜を縫ふ稻妻の

短かい生命の人間が

悪事増長の數々に

自ら滅ぶる物語り

春の野を燃ゆ陽炎か
有りと見て無き刹那の影
浮いたる雲の榮華に迷ひ
因果は廻る小車の

丹波の園部在、野澤三平を殺しに行つて、首尾能く目的を遂げ、戻つて來れば直

ぐに最初約束の物を配ける事となつて、今日は戻るか、明日は歸るか、待ち受けて居る三谷熊彦は歸つて來ずに、悪黨辯護士川島猛の手にかゝつて、ロンドンの公園で果敢ない最後を遂げた筈の、弟君正義が、突然に歸つて來たので、奥方の龍子は勿論、家令の松崎は、一時色を失して驚ろいたが、其處は悪黨同志、其の昔、柳橋で鐵火のお龍とまで緋名を取つた龍子、三百萬の財産と、奥方を横取りしやうとする位の松崎であるから、何時までも周章へ騒いぢや居ない。

龍「オヤ、能くまあお歸り遊ばしました」

と奥方が先づ愛想を云ふ、

松「これは、若旦那様には、能くお歸り遊ばしました、何の御便りもなく突然の御歸朝は、學校の御用件のためでもござりまするか」

と松崎は白くれる。

正義「能く歸りもしない、お前達には悪いであらう、又學校の用件で歸つた譯でも

ない、夫れは後に分る問題だ、氣にかゝるのは兄上の御身、只今何處に御在で、ござります」

龍「若様には何うも申し譯もござりません、御前様には以前から、精神に異状を來しましたので、大學でも治療を受け、種々手を盡して見ましたが御全快致しませす只今では奥の座敷に入れてあります様な次第でござります、私達が側に着いて居りました、彼あ云ふ御病氣を起させると云ふのは、如何にも注意足りないやうに御思召されませうか……」

松「そりやあ若旦那様の前でござりますが、奥様は晝夜衣帯もお解き遊ばされず、只管御看護遊ばしたのでございますが、御前様の御病氣は益々御募り遊ばすばかり今では已むを得ず、奥座敷に御入れ遊ばしてあるのでござります」

二人の悪黨が、口を揃へて辯解がましい事を云ふのを耳にも入れず、正義はツカツカと奥の座敷に這入つて行く、

フシム哀れや兄の正則は

暫し見ぬ間に昔の係何處へや

髪は延び眼は落ち凹み

いつたりなつて床の上

只だスヤ／＼と眠り居る

以前から壯健な身體ではなかつたが、夫れにしても餘りの寢れやう、之れも皆な悪人共の仕事であるかと思ふと、正義は起つて居ても堪らなくなつた、直ぐにでも警視廳に云つて、悪人共を縛り上げて遣らうかとも思つたが、屋敷に巢ふ悪人とは云へ、屋敷から繩付を出したのでは、先祖に對して申し譯ない、先づ兄上に逢つての上、にせんものと、

正義「お兄上、お兄上、お眠みでございませうか、正義でございませう、正義がロンドンから歸りましてございます、お兄上、お兄上」

静かに近付いて、眠息を覗くやうに云ふと、眠りから覺めた正則、睨と正義の顔を眺めたが、

正則「おうお前は弟」

正義「お兄上」

フシム兄は弟の弟は兄の

手と手を取つて男泣き

悪「好く歸つて呉れた、私は既うお前に逢へないかと思つて居た」

弟「お兄上、飛だ事が出来上りましたね、只今が、佐原家浮沈の岐れ時でござりまする、御病氣は如何です、お氣を丈夫にして下さい」

兄「氣は丈夫にして居ても、身體が悪い、頭が悪くなつた、大勢の奴等は寄つて集つて、私を苦しめるばかりぢや、私も以前のやうな身體であれば、什麼にでも出来るのぢやが、こゝ斯う衰弱して居たのでは、皆なの爲す儘に任せて置くより仕方はない、之れも皆な私が悪かつたのぢや、弟、堪忍してお呉れ、阿父様御在世の折から、種々御意見下さつたにも拘らず、僅か一婦人の愛に溺れたのが身の破滅ぢや、

矢張り野に置け蓮華草、美しい花と見て、手に入れたのが心得違ひ、龍子を奥にし
たと云ふのが私の誤りぢや、死んだ阿父様にもお前にも、實は會はせる面目はない
私は死んでも宜い、佐原の家名を汚したくない、夫れで、幾らお前に便りを仕やう
と思つても、夫れは皆な途中で取られて了ひ、お前の便りは、一度も私の手許に届
いた事はない、そゝそれに氣にかゝるのは若の正夫ぢや、先頃までは初枝に連れら
れて、此の座敷の外まで、毎日幾回となく来て居たのが、此の頃では影も形も見せ
ては呉れない、誰れに聞いても、只今病氣で入院し初枝が看護に附いて行てるとの
話、病氣と云へば氣が、りぢやで、聞かうとしても教へては呉れない、私はもう氣
が焦々して、何だか氣でも狂ひさうな心かしてならぬ……
弟「お兄上、私が歸つて参りました以上、誰が何と申さうと、お兄上には斷じて指
一本も指させは致しません、御安心下さい、夫れに付ては、私も種々に聞き込んで
も居りますし、之れは佐原家の一大事と、取るものも取り敢ず、ロンドンから歸つ

て参りましたのです、併し、其の理由は只今は申し上げませぬ、御衰弱の上、神經
を昂奮なさせつては不可ませんか……だがお兄上、御油断はなりませんよ、私は
佐原家の面目を潰さぬ爲めには、如何なる手段を取るか知れませんが、夫れだけ
はお兄上も、豫め御承知を願ひたいのです」
フシ「久方振りに兄と弟の對面も 話しは涙に濕り勝ち
正「皆な私が悪いのぢや、お前に頼む、佐原家の基礎を、大磐石に直して呉れ」
弟「お兄上、善い悪いは此の場合論ずる處ではありません、佐原家の屋の棟と柱に
は、只今白蟻以上に恐ろしい蟲が生いて、佐原家の土臺から引ツくり覆さうとして
居るのです、此の恐ろしい蟲を退治するには、石炭酸かホルマリン油か、何にしても
根本的に退治せねば、佐原家は潰れて了ふのです……お兄上、お兄上の眼にはお
嫂様の御様子に、怪しい事は映りませんか」
兄「何？奥の様子に……奥が育ちが育ちで、我儘勝手ばかり、到底も佐原家を支

配して行く女ぢやないとは思つて居る」

弟「只だ夫ればかりでございますか」

兄「外に何にも」

弟「お兄上、お情ない、何事も申し上げずに、事件が解決してからお話し爲やうと存じましたが………實は佐原家の柱に喰ひ入つた白蟻は、お嫂様でございますよ」

兄「え、奥が何うした」

弟「お静かに」

フシム 静かに來つた奥方龍子

如何な話しを交すかと

もう宜い頃と素知らぬ振り

態と正義一人を先に遣り
次の室から様子を探り

龍「ねえ、御前様はコンナに御衰弱遊ばしたのですよ、醫者の鹽澤も、毎日殆んど附き切りで、治療はして居るのでございませけれど、何しろ神経がね」

正義「ハ、爾うですか、種々何うも御心配をかけました」

龍「それにね、御前様は、御自分では病氣ではない、何うもないと有仰るのですけれど、醫者の方は、爾う云ふのが精神に異状あるからで、第一衰弱するのと、眼色が普通でないのが何よりの證據だと有仰つて、種々薬を變へて居るのでございませよ」

正則「馬鹿云へ、私は病氣ぢやないと彼れ程云つてるぢやないか、病氣でないものを病氣扱いにするから私は癩癩を起すのぢや、癩癩を起すは又病氣が重くなつたと云つちや、嫌やな薬を無理に吞ませるぢやないか、そして私を、體裁の宜い座敷牢の様なものに入れて置くと云ふのは不都合ぢや、お前に云つても分らない、初枝を呼べ」

龍「まあ、驚ろきましたね、それが不可ないのですよ、矢ッ張り御前様の腦がお悪いのですよ、初枝は、若の入院に、看護に行つてると申してあるではございません

か

正則「ア、爾うぢやつたか」

正則はがつかかりした様に、又床の上に横はつた、龍子の方では邪魔者が歸つて來て、九分九厘まで成功してゐる仕事に邪魔されて堪るものかと云ふ心と、正義の方では、此の奸婦奴、如何に外面如菩薩を装ふてよ内心如夜叉、今に化の皮をヒン剝いてやると云ふ心とが、互ひに暗黙の間に渦巻いて、

フシム暫し三人は無言の儘

龍「御前様も御疲勞の御様子ですから、暫らく彼方へ……種々お話も承りたうございますから」

正義「ハイ」

フシム話は變る松崎の室 今しも對ひ會つたる鹽澤醫師

松「困つた事が出來たものだ、何とか好案は無いものですかね」

鹽「好案と云つたところでね、何しろ御當主の弟であつて見れば……」

松「御前様の弟であらうが何であらうが、それは構はない、目的の前に手段を撰ぶ猶豫はないからね」

鹽「手段を撰ばないと申しますと」

松「九分九厘までの成功を見るまでに既に幾多の犠牲を拂つて居るのぢやから、之れは、貴方の手を借りて、魔睡劑か、魔睡藥か……夫れから先は他人手は借りません、此の松崎が片付けますからね」

鹽「爾うですね」

松「貴方も、最初から一口乗つてかゝつた仕事ぢやなしかね、寶の山に入りながら手を空しうして歸るやうな馬鹿でもあるまい」

鹽「爾う云はれては……ちや何とか爲て見ませう」

松「やつて呉れますか」

「宜うございます」

フシム三百万の財産を

欲しいばかりの悪黨仲間

人の生命は土芥の如く

悪い謀計致される

此方は正義、内心は怒氣満々、忠僕宗平が、態々ロンドンまで来ての報告と云ひお光が佐原家の庭掃除で、松崎と熊造との話と云ひ、若君正文を亡きものにせんとして却つて熊造に一杯喰はされた出来事と云ひ、龍子が松崎と一緒になつて、悪黨共を語らひ、佐原家の財産を横領せんと企て、居る事は、今は一點の疑ふ餘地もなく、恰かも符節を合はせたやうなので、人の皮着た虎狼、片ツ端から洋刀の錆にしてやらうかとも思つて居た、逸る心を昵と押へて、龍子と一緒に入り來つた松崎の室、互ひに胸に一物あるので、何方も一寸口を利かない、暫らく經つて正義は、正義「松崎、私の急に歸朝したのは他でもない、少し家の用件の爲めぢやが……家の用件と云つたところで、お兄上は御病氣でも、お嫂様もお出でになれば、お前

も居て、凡ては嚴重に取締りは出來て居る事とは思ふが世間の口は兎角蒼蠅いもの日本からロンドンまで、幾千里、誰れが知らせるとなく、佐原家の善くない噂が私の耳にも這入つた、決してお前や、お嫂様に、兎や角の疑ひをかけて歸つたと云ふ譯ぢやない、又、私は、お前等が、如何なる事を爲て居るかは知らぬが、私は只だ佐原家に關した事ばかりを耳にしたので歸つて來たのぢや、兎に角、一應親族會議を開いて、佐原家の財産が幾らあつて夫れが何うなつて居ると云ふ事を調べて置きたいと思ふのぢや」

フシム口には夫れと云はねども

針で包んだ眞綿の舌に

傷持つ脛の松崎や

嫂の龍子は胸に釘

正義が、鋭どい眼で、チロリくと、龍子と松崎との顔を、交るゝに見るので此方も幾分薄氣味が悪い。

「オヤ、左様でございましたか、妾は又ドンナ御用事でお歸り遊ばした事かと存

じました、あの、ロンドンまで佐原家の悪い噂が響きましたので、それでお歸りな
さつたのでございますか」

正「さうです」

松「ドンナ事は存じませんが、此の松崎が家令として、萬事のお世話を致して居
る間は、決して他人に指一本指される覚えはないのだから」

フシム狐と狸が同腹で 言葉巧みに化かし合ふ

正「夫れは無論爾うあるべき筈ぢや、否や、爾うなくてはならぬのぢや、併し世の
中には、忠義一圖の者と思つたのが、夫れが却つて大泥棒であつたと云ふ例の無い
事はないのぢやから」

鷹「え、正義さん何ですつて、ぢやア貴方は人の噂を耳にして、私達を大泥棒だと
有仰るのですか」

正「お嬢様、爾う誤解しちや不可ません、何も私がお嬢様を、泥棒だとは申しませ

ん、只だ世の中には爾うした例が澤山あると云ふのです、畢竟小人罪なし、珠を抱
いて罪ありで、飛だ不量見を起すのが小人共の常ですからね」

鷹「貴方の御言葉は、嫌やに諷刺するのね、妾達を泥棒と云はないばかりです、ね、
そりやア貴方も知つての通り、妾は小人です、藝妓上りです、柳橋で藝妓をして居
たのです、併し何も妾から頼まれて、是非御前様の奥様にして下さいと頼んだ譯ぢやありま
せんよ、御前様の方から頼まれて、妾は佐原家の者になつたのですよ、小人罪なく
珠を抱いて罪ありとは何です、妾が何時珠を抱いて罪を作りました」

正「ハ、ア、私の今の言葉が、お嬢様には、お嬢上様自分の事の様に聞えましたか
ハツハ、、、皆な胸に問ふて見れば直ぐ分ります、胸に問ふて覚えがなければ、
別に心を咎むる事もありませんが、若し覚えがあるとすれば、そりやア良心が咎め
るでせう、人間であつて、人間の道を踏まない者は、他人の云ふ事が全く自分の
事ではないかと邪推さるゝものですよ」

「何ですか、正義さん、貴方は夫れは誰れに有仰るのです」

正「誰れにも云ひません、お嫂上様と話して居るのです」

風雲頗る危急と見て取つた松崎、

松「ま、ま、お互ひに爾う云ふ事を有仰るものぢやありません、若様が態々ロンドンからお歸り遊ばしたのもつまりお屋敷を大事と思へばこそ、奥様が、其の様に有仰らるゝのも、お屋敷に後指をさゝれたと云ふ口惜し紛れで、つまりは之れもお屋敷を思ふからです、私も家令として、お屋敷のお世話を致して居る以上、兎角の噂をされると云ふ事は心苦しい話ですから、其の噂の出所を一つ確かめて、其の上で親族會議なり、又何か他に適當の所置を取る様にしたら宜からうと思ひますが、如何でせう、若様、奥様」

「フシ」鐵火と云はれたお龍でも

惡黨仲間の頭梁だけに

斯うなりや女子で役者が下だ

盗人ほど猛々しく

證據呼はりなしながら

自分で淹れる珈琲三ツ

松「ねえ、爾うぢやありませんか、そりやア折角若様もお歸り遊ばしたのですから明日にでも親族會議を開きて、お屋敷の財産目録と、現在の物品とを引き合せるなり、動産不動産を調べるのも宜うございませう、何方にしても、明りが立てば夫れで宜いのですから……さう、冷めない中に召し上り下さい」

松崎は、龍子に目配せしながら、珈琲茶碗を取つた、龍子も一口呑んで下に置きながら、

龍「ねえ正義さん、お悪く思はないで下さいよ、妾もツイ口惜し紛れに申し上げたのですから」

正「いゝえ、別に悪く思つちや居ません、未だ種々話したい事もあるのですが、それは何れ後日にお話する事として、それぢや、兎に角一應、明日親族會議を開く事にしませうね、其の席上で私から、私の聞き及んで居る事だけを發表させよう」

松「それが宜いでせう、ねえ奥様」

龍「ハイ、爾う致しませう」

松「さア、冷めない中に召し上つて下さいませ」

セメム「云はるゝまゝに正義が

口の處まで持つて來ると

泳えに泳えた正義が

正「貴様、私に毒を呑ませるのか」

セメム「一聲叫んで珈琲茶碗

覗ひは十分誤またす

眉間傳ふて流るゝ血潮

松「な、何をするツ」

龍「正義さん、何を爲さるのです」

何氣なく珈琲茶碗に手をかけて

ブンと鼻を衝いたる 異様の臭氣

ハツタと睨んだ松崎の

松崎目蒐けて投げ付けたり

顔に當つて茶碗は破れ

正「何もせん、斯うなつたら仕方がない、覺悟をしろツ」

松「何をツ」

松崎もさるもの、眉間の痛手も打ち忘れ、自暴自棄で正義に組み付いて來る、

フシム「折柄 玄關に 足音の

悪黨三谷熊彦を捕縛して

既う之迄と觀念なした松崎は

松「奥様最後ぢや」

フシム「組み付く正義振り放し

其の儘姿は消え失せたり

次の室へと逃げ込むと

龍子松崎兩人が如何の次の段

歸つて來たる 杉村薫

遣て來のが丹波園部の松並木で

遣て來るのが丹波園部の松並木で

第九席

フシム「沙羅雙樹の花の色は

盛者必滅の理を示し

祇園精舎の鐘の音は
盛者必滅會者定離

諸行無常の響あり
兎角浮世は儘ならぬ

松崎は、正義の云ふ儘に、明日親族會議を開くからと安心させて、手盛りの毒薬を珈琲に混ぜて、一服盛つた上で、徐ろに仕事にかゝらうとしたのだが、正義は萬事に注意を拂つて居たから、此の松崎の計略は鴉の嘴と喰ひ違つた、此の時正義が嚇と怒らずに、毒と見たなら其の儘下に置いて、直ぐに最後の手段を取れば宜かつたのであるが、其處は未だ年が若い、散々佐原家を掻き混ぜて置きながら、尙ほ自分にも毒を吞ませやうとは不埒至極と思つたものだから嚇と激昂して、珈琲茶碗を投げ付けた、狙ひは外れずに松崎の眉間は破つたが、其の爲めに取り逃がしてしまつた、己れと追つかけて次の間に來た時には、既う松崎の姿は見えない、天に昇つたか、地に潜んだか、幾ら捜しても分らない、引き返して見ると、今度は龍子が居なくなつて居る、其處に、杉村も遣つて來て、實は斯々如々の次第であると様子

を聞いて、地團駄踏んで口惜しがつた、三谷熊造を捕縛して罪狀の一什一伍を自白させたから、龍子や松崎はもう囊の鼠、何時でも難なく逮捕の出来るものであると高を括つて居たのが失敗、併し只今まで茲に居たものなれば、遠く逃げる氣遣はない、或は未だ屋敷の中に隠れて居るかも知れぬと、八方を捜したが分らない、斯うなつては、只だ牛込警察の手ばかりでは不可ない、何處に逃亡するか知れないと云ふので、警視廳初め、各警察も全力を挙げ、重大犯人であると云ふので搜索したが、依然として龍子、松崎の行方は知れない。此方は佐原家、早速財産を調べて見ると、行方の知れない現金が、五十萬圓ばかり、夫れに種々の家實が無くなつて居る、斯うなると、愈々若君の正文を誘拐して殺したのも、彼等二人に相違ないと云ふので、牛込警察に留致されて居た初枝は放還されて、再び佐原家で、正則の世話をする事となつたが、皆な死んだと思つて居た正文は、お光が連れて來て、茲に目出度く佐原屋敷の若君として慈しみ育てられる様になり、正則の病氣も次第に快

方に向いて来ると云ふので、一度傾むきかゝつた佐原の屋敷は、何うやら取り止めが付き、龍子や松崎が居なくなつたので、悪黨共の出入りは無くなつた、佐原家は斯うして危ふく横領を免れたが、肝腎の龍子と松崎の行方が分らないのでは、未だ安心する事は出来ない。これには杉村は勿論、正義も困つた、杉村探偵は、何う思つても佐原の屋敷が怪しまれてならぬ、と云ふのは正義が珈琲茶碗を投げ付けて、組み付いたのを、振り棄て、逃げ出した外に逃げる間は勿論ない、して見れば家内に何か秘密の室があるに違いないと、騒ぎのあつた次の間を仔細に調べて見て驚ろいた。

フシM床の柱の釘を落せば

次第に開く隠れ窠

扱ては此の窠倉に逃げ込んだのに違いないと、杉村探偵は、正義と一緒に手探りに這入つて見ると、奥へくと床下を掘つて、稍や二三十間も来たと思ふ處に、疊すら十疊も敷かれる位の廣場になつて、真中に卓子が一脚、其の周圍に椅子が三四

脚並べてある、二人は益々驚ろきながら蠟燭の火で四邊を見ると、卓子の下に鞆だの、手提金庫だの、種々の書類の破つたのが散らばつて居る、扱ては此の窠に逃げ込んで、夜中に出ては種々のものを取り出したのであらうと、尙ほも仔細に四邊に氣を配ると、何處からともなく一筋の明りが射して来る、夫れに傳ふて進んで行くと、ヒョッコリ出たのが、中庭の植込みになる阿亭の押入れの中、彼等二人は之れから脱けて姿を隠したに違ひないと、杉村探偵は何やら頻りに考へ込んだ。

フシM話は茲で二つに分る

麻布霞町の但ある横町

移轉て來たる夫婦の者

家には女中一人の、後は夫婦切り、門札には水野正胤とある、近所の者の話では何でも豫備の將校で、可なり貯蓄もあるらしいとの話、水野正胤とは世を忍ぶ假りの名、之れぞ松崎と龍子とが、夫婦と見せて構えた一戸である。今日も今日とて龍子が、

龍「ねえ松崎さん」

松「何です奥様」

龍「奥様は嫌やですよ、斯うなつやア龍子と呼んで下さい」

松「だつて貴方も松崎さんと有仰るぢやありませんか」

松「爾うでしたね、それぢや之れからお互ひに氣を付けませうね、處でね、彼の川島さんにも困つていますね」

松「爾うですね、川島は我々に對して金を請求する權利はないのだ、態々ロンドンまで出かけて置きながら、肝腎の仕事は爲ずに金を使つて……其の爲め我々の事は中途で滅茶々にされたのだから」

女「旦那様、此の方がお見えになりました」

と取次いだ一葉の名刺、見れば今噂さの川島猛、困つた奴が來たものと、顔を擧めたが、

松「應接へ通して置け」

女中の案内で應接に通つた川島猛、煙草の煙を輪に吹いて、

川「ハ、ア、此の床の間の飾りは、佐原の屋敷にあつたのぢやな、掛軸だつて爾うぢや、圖々しくも能く並べて置かれるものぢや」と獨語つて居る。

松「ヤ、お待たせしました」

川「イヤ、何うしまして、奥様は？」

松「奥に居ります、時に川島君、君は好く我々の居る處が分つたね、今朝手紙が來たものだから、何うして分つたらうと不思議に思つて居たのだ」

川「ハ、……幾ら隠れても駄目ですよ」

フシハ兎角蛇の道は蛇が知る

松「實はね、君から手紙を貰ふまでもなく、直ぐ同志の者に知らせて、此處に會合

の上、何とか皆な逃れるやうにしたいと思つて居たのだが、何しろ移轉し匆匆なものだから」

川「爾うでせう、それにしても能く逃げましたね、私を貴方の仲間だとは知らないものですから、今日もね、裁判所で種々其の話があつたのですよ」

松「何と云つて居る」

川「松崎と云ふ奴は太い野郎だ、奥方と不義をした上に、三百萬圓の財産横領を企てる杯とは言語道斷、奥方と不義するだけでも太い野郎だ」と

松「オイ、川島君、爾う太い野郎は耳が痛いね、夫れで外には何とも聞かない」

川「夫れから、何時の間にアナン大仕掛けな窀穸を掘つて居たのか、大泥棒する位の奴は、平素から心掛けが違つてね」

松「君川島君、そんな事を云つちや困るぢやないか」

川「だつて爾うぢやないかね、それも私が云ふのだと、貴方はお怒りでせうけれど今日皆なで爾う云ふのです、何しろ松崎の野郎は太い野郎だ、泥棒と彼の位出来れば結構だ」と

松「好いよ、既う夫れは聞かない、太い野郎だの泥棒だの、世間での聞えが悪いぢやないか」

川「だつて眞實だから仕方が無いでせう………時に、私の今日お尋ねしたのは、例の物を頂戴に参りましたのですがね」

松「夫れは今朝の手紙で見ましたがね、川島君、君は確かにロンドンで正義を殺つたと云つたのが、生きて歸つたばかりに、我々の事業は滅茶々々になつたぢやないか、何故そんな間違ひを爲出来したんだ」

川「それは私にも分りませんね、私は確かに手應えあつたと信じて居たのですから死んだと思つた正義さん、此の世にあらう手前とは、お釋迦様でも氣は附くめえで

さアね」

松「冗談處ぢやないよ、其の爲め我々の首は危なくなつたのぢやないか」

川「首の危ないのはお互ひで、夫れは以前から極つた話しぢやありませんか、今更らそんな愚痴を零すほどの善人でもあるまい、兎に角、貴方が持ち出した金は、少く見積つても三十萬、其の中の一割だけ頂きませうか」

松「何、三十萬圓を持ち出したつて、冗談ぢやないよ君、生命からく逃げて來たのに、三十萬圓は思か、三萬圓も持ち出す豫猶は無いちやないか」

川「ハ、ハ、松崎さん、そんな事を云つたつて、其の口に乗つて、ヘイ左様ですかと引退る様な私ぢやございません、それも眞實に、取出さない金なら、出せと云ふのが無理かも知れませんが、私はちやんと、取出した事實を調べて居るので、そんな子供欺しの手には乗りませんよ」

ソシハ佐原家で調べた處 現金だ で五十萬圓

其他家寶の種々が

藝は道に依つて懶發して

紛失したとの話しぢやないか

妾しやすつかり調べてあるよ

川「ね、松崎さん、だから私は無理は云いません、其の五十萬圓を、三十圓と少く見積つての話しです、斯うまで根を洗つて來てるのですから、豈夫に嫌やとは云はれますまい」

松「いや、流石豪いもんだ、爾う云はれりや隠す譯にも往かんが、川島君、ぢやア直ぐに渡すと云ひたいのぢやが、金は皆な奥様が藏つてあるから、今夜、御苦勞ぢやが、私の家なり、又は芝公園なり、何方でも都合の宜い方へ來て呉れ玉へ、夫れまでには屹度、私が受取つて置くから」

川「何？奥様が持つて居るから今は都合が悪いと有仰るのですか、此の話は奥様の方が宜いのでせう、奥様の方が發起人ですからね、出すだの出さないだのは有仰るまいと思ひますが、一應尋ねて下さい」

松「爾う思ふのも無理はない、併し其處には、局外の者の考へ及ばない事もあるから、兎に角、私を信用して仕事をして呉れたのだから、私を信用して、今夜まで待つて呉れたつて宜いぢやないか、君ばかりぢやない、醫者の鹽澤にも幾分か遣らなきやならん、彼の事件から、直ぐに外國にでも高飛びしやうかとも思つて見たか夫れでは却つて注目を惹くから、何うせ破れかぶれた、太く短かく暮らした方が面白いと云ふので、洒々と構え込んで居る様な譯だから、決して逃げも隠れもせん、君も、鹽澤に逢つたら、二三日中、午後十時頃から先きに、私の家まで来るやうに云つて呉れ」

川「間違ひはありますまいね」

松「大丈夫だ、何うせ遣らねばならぬ金だから、只だ君等に氣の毒なのは初めの豫想の五分の一にも達しないけれど、之れで我慢して貰はなくちや仕方がない」

川「ぢや、今夜何時頃に伺ひませう」

松「爾うだね、餘り早いのも、何だか世間から見られるやうで氣が隠ける様でもあ
るから、矢ッ張り十時過ぎかね」

川「宜うございます、其の頃伺ひますから、間違ひないやうにね、奥様よろしく
ちやア之れで失禮いたします」

と約束して出て行く川島猛、

フシメ後見送つた松崎が

薄氣味悪い笑ひ洩して立上る

龍子の室に来て、斯々と語ると。

龍「それで貴方は、川島に三萬圓渡すと約束したのですか」

松「約束はしたが、併し直ぐに取り返して遣るから宜いです、今、遣るの遣らぬの
云ひ争つて見た處で仕方がない、一度三萬圓だけ渡して遣れば喜びますからね」

龍「渡したら返しやしないよ、彼廢男ですから、妾だつて爾うよ、一度貰つたら返
しつこはありませんからね」

「松」其の邊の事は私にお委せなさい、彼の奴の遣り損ないばかりに、一同の者が首を氣遣ふやうになつたのぢやありませんか、貴女が三萬圓遣れと有仰つても、私が承知しませんから、兎に角、私に三萬圓だけお預けなさい」

「フシ」後は云はずに目で話す

變りやすいは秋の空

日暮れ頃から降り出す雨の

更くるに連きシヤア〜〜

風さへ附けて眞の暗

宵の程から、麴町三丁目の、川島猛の川口を、行きつ戻りつ、頻りに家の様子を窺つて居る一人の男、頭からすっぽり外套を冠つて雨の中、其の中に七時も過ぎ、八時九時、十時を過ぎた頃に、自用俥に乗つて出かけたのは確かに主人の川島猛、夫れと見た件の男は、飛鳥の如く身を躍らして、辻俥に飛び乗り、男「車夫、酒代は遣るから、彼の車を見失はぬやうに尾けて行け」

本「何方へ行くんで」

男「何處でも宜い、彼の車の行く處まで急ぐのだぞ」

「フシ」秋の夜の

都大路は早更けて

横飛沫する雨の中

二挺の車は螢の如く飛で行く

川島の俥が、霞町の水野正胤と表札打つた松崎の表に止まつたのを見た件の男、遠くから俥を棄て、足音忍んで近寄るとも知らず、川島は門を這入ると、中からピンと錠を卸した、霞町邊は晝でも淋しい、殊に秋の夜の十時を過ぎて、一時に近い、雨風の夜であるから人通り一人も無い、ザア〜と降る雨、ビウ〜と吹く風さへも物凄いい中を、件の男は四邊に眼を配つて居つたが、

「セメ」ヒ

高塚に飛上ると見る間も待たず

男の姿は暗に隠れて

後は只だ雨の音

案内に連れられて、應接に通つた川島は、松崎の出で来るのを待つて、川「今日は失禮しました、お約束の通り頂戴に参りました」

松「ヤ、何うも御苦勞、何しろ此の雨風ちやからお困りだつたらう」

川「何うも酷い風雨になつたものですね、幌を下して居ると、何だか吹き飛ばされさうで險呑でなりませんでした」

松「爾うでせう、併し斯う云ふ話をする時は、却つて此の風雨が仕合せです」

云ひ付けてあつたものか、其處に麥酒やウキスキーの角瓶が運ばれて、果物杯を益に盛つて龍子が来る。

龍「既う今夜はお仕事もありますまいから、緩然お遊んでいらつしやいよ」

川「有りがたうございます、併し緩然して居られない身體ですから」

松「まあ宜いぢやないかね」

松崎は麥酒を注いで、自分も飲みながら、

松「まあ一杯飲み玉へ、成功を祝ふのぢやないが、一杯位は宜いだらう」

川「頂戴します、併し、未だ先に頂戴致して置かねばならんものがありますからね」

松「ア、爾うぢや……奥様、晝間お話し爲た物を……」

龍「おう爾うでございましたね、川島さんにも種々御心配かけましたが、目的が半分も達せないのです、お氣の毒でございましたね」

龍子は立つて奥の室へ……

松「時に川島君、丹波に行つた三谷君の消息が無いが、何うしたのだらう、夫れに牛五郎の野郎も歸つて来ないし、二人も行つてるのだから仕事を遣り損なうやうな事もあるまいが、何の便りの無いのは何う云ふ譯だらう」

川「爾うですね、仕事を爲て歸つては来たが、貴方達が居ないので、佐原家に行く事も出来ず、と云ふて貴方達の所在が分らないので、困つて居るのかも知れませんね」

松「成程、何方にしても、我々の仕事は露見したのだから、之れからは巧く身を隠しさへすりや宜いのだ、君も餘程の注意を拂はないと不可ないよ」

川「有りがたう」

龍子の持て来た伏紗包み、松崎は受取つて、

松「さ、約束通り三萬圓、百圓紙幣で三百枚改めて受取つて呉れ」

川「ヤ、何うも有りがたう、ちやア確かに受取りました」

と懷中に收めて、

川「それぢや之れで失禮します」

松「宜いぢやないかね、未だ少し話もあるから、一杯呑んで歸つたら何うだね」

龍「眞實に川島さん、御ゆつくりなさいよ」

川「折角ですが、之れで失禮します」

松「爾うですか、ちやア又遊びに来たら宜いでせう」

川「ハイ」

セメ「川島猛が今歸らんと

應接室を出やうとする背後から

川「な、何を？」

フシ「急所の痛手に川島が

打ち跨がつた松崎の

咽喉元目蒐下さんと一刹那

男「御用だッ」

セメ「と右手の手首に捕縄かくる

フシ「之れぞ鬼神と呼ばれた杉村薫

善人「榮え

最後の話は一寸一息

隠した短刀抜く手も見せず
脾腹の邊りに突き込んだり

打ち倒るゝ其の上

及は一閃川島の

障子蹴放し跳り込る件の男

茲に松崎杉村兩人の格闘から
悪人愈々滅亡すると云ふ

第十席

フシム不義の榮華は空行く雲

果敢ないものと知りながら

罪の中にも恐ろしき

多くの人の生命をば

左れど天公何時までも

天道善を照らす時

龍子松崎兩張本人を初とし

佐原子爵のお家は萬代搖ぎなき

有りと見る間に消え果つる

尙ほ憧憬れて罪多き

財産横領其の上に

絶たんと目論む悪人共

如何でか悪に與せんや

悪魔は暗に葬らる

之に與した一味の悪黨影を絶ち

勸善懲惡の物語り

松崎俊夫と佐原子爵夫人龍子とは、正に財産横領が成功せんとした時、態々ロンドンまで、正義を殺して行つて、目的を達したと云つて歸つて來た川島辯護士の言

葉が違ひ、死んだと思つた正義が歸つて來たばつかりに、仕事は半途で失敗したが夫れでも五十萬圓からの財産を取り出して、麻布霞町に、偽名をして松崎と龍子とは隠れ住んで居た、夫れを捜し當てたのが川島辯護士で、成ると成らぬとは我の關する處ではない、自分は只だ盡すべき努力は致して居ると云ふので、約束の三萬圓を請求に出かけた。仕事にかけては松崎が上かも知れぬが、強請と云ふ段になると川島が一枚役者が上である、松崎も仕方がないので、云はるゝ儘に今夜十時過ぎに來て呉るれば三萬圓を渡すと云つて歸したのは、松崎に深い量見があつたからである、處が牛込警察署の杉村刑事、佐原家に踏込んで、松崎や龍子を逮捕しやうとした時に姿を隠したまゝ、行方が更らに分らない、人知れず作つた竈倉から逃げ出したものとは見當が附いたが、夫れから何處に隠れて居るのか雲を攫むやうで手がかりがない、種々思案の末、松崎等と懇意で、夫れまで始終佐原家に入りして居る者は誰々であつたかと調べて見ると、第一に川島辯護士、夫れから鹽澤醫師である、

之りやア此の兩人が怪しいと睨んだので、其の晩、川島の家を警戒して居ると、十時過ぎて、雨風の夜を俾で出掛けたので、其の行衛を突止めたら、松崎の手が、りになるかも知れぬと、自分も俾を命じて其の跡を尾けると、俾は一目散に暗を縫ふて霞町の但ある家の前に止つた、門を這入ると家からカチリ錠を卸されたので、扱ては愈々怪しと睨んで、扉の内に忍び込み、中の様子を窺つて居るとも知らぬ此方の松崎、一應川島に三萬圓を渡して置いて、イザ歸らんとする後背から、紫電一閃、柄も通れと短刀を以て刺したのだから堪らない、如何に悪黨の川島でも「呀ッ」と叫んで血煙立て、其の場に撞と打ち倒るゝを見て、川島の上に跨り、今正に止めの一刀刺さんとする時「御用」だと飛び出した杉村薫、手早く松崎の、短刀持つた右手に捕繩をかけてズル／＼／＼？、

松「己れ、何を猪口才な」

と死物狂いに、川島を打ち棄て、杉村に斬つてかゝる。

杉「御用だッ、神妙にしる」

豫て覺えの柔道、松崎の手に杉村の手がかゝつたと思ふ刹那、

フシ／＼ エ イ フ と 一 聲 運の盡にや松崎は

筋斗打て應接室の隅の方へと投げ付けらるゝ

松「何ッ」

と起き上らんとする奴を、息をも吐かせず折り重なつて、高手小手に縛しめたので、流石の松崎も何うする事も出来ない、龍子は、意外の出来事に、幾ら悪黨でも其處は女、呆氣に取られ、ブル／＼震へて居たが、漸やく本氣に復つたやうに、
龍「貴方は杉村さんぢやないの、何故そんな事を爲るのです」

杉「ヤ、奥様、それは私の方からお尋ねする事です、此の川島辯護士を、何故一刀の下に殺したのです……それは何うでも宜い、後に分る事ぢやから、サ、奥様もお氣の毒ながら杉村がお伴を致しませう」

龍「妾は貴方と行く譯はありません」

杉「奥様になくても私にあるのです」

龍「否え、何と云つても行きません」

杉「然らば已むを得ませんから捕縛しますぞ」

龍「恩人に繩をかけるのですか」

杉「已むを得ません、併し私は佐原子爵閣下には恩を受けましたが、奥様には何の

恩もありません、殊に佐原家の柱を倒さうとする悪人の片割れであれば、子爵閣下

の御恩に報ゆる爲めです、御覺悟なさい」

杉村薫は、狂氣の如く狂ひ廻る龍子をも捕縛し、一應警察に引き上げ、直ちに電

話で此の事を通知したので、検事局からは検事や豫審判事が松崎の家に出かけて川

島の死體を檢視する一方、此の重大犯人の松崎、龍子兩人の取調べを爲る事になつ

た 其處で、此の事を佐原家に知らせたので、今まで夢を見て居たやうな正則は、

初めて無明の夢が覺めた、扱ては悪人共が集まつて、此の佐原家の財産横領を企てたのであつたかと、且つ驚ろき且つ呆れたが、其處は流石恩愛に繋がる息子の正文は、憎いとは云へ龍子の腹を痛めて生れた子である以上は、何うかして助けたいと思つたが、

フシハ斯くと聞いたる正義は

此は兄上には何事を宣ふぞ

夫れも嫂の悪いから

佐原家三百年の大事に代て何さる

今にして悔ひずんば

弟正義一生のお願ひぢや

根を掘り返して枝葉を枯らし

涙流して切諫する

色を作して聲勵まし

松崎俊夫固より憎い奴なれど

一時の愛着に引かされて

若しも兄上

將來悔ゆるも及ばぬぞ

何うぞお家に巢ふ悪人の

父祖の御名を辱ざるやうと

正「おう、弟、好う云ふて呉れた、私は今日まで迷ひながら、尙ほ迷はうとした、お前の今の一言は、私は弟の言葉とは思はぬ、父上が天上より仰せられた言葉と思ふて、龍子の事は一切諦らめた、お前の氣の濟むまで、何事も解決して呉れ」

弟「既う何事も解決して居るので、兄上が其のお心になりさへすれば、何事もなく、佐原家は萬代搖ぎない大磐若でございます、夫れにしても嫂は、何うしてそんな氣になつたのか、現在自分の腹を痛めた正文を殺してまで、財産に眼が眩んだのか分りません、幾ら鬼の様な心でも、既う之れまでと思へば善心の萌すもの、一度は殺さうとまで思つた正文でも、血を分けて居れば思ひ出しも致しませう、他處ながら分れをさせて参りませう」

と、正義は、初枝に正文を伴れさせて、牛込警察にやつて来る、署長に逢つて如斯々の次第と、事情を語すと、此方の心を察して逢はせて呉れる事となる、

「フシ」連れられて来る留置所の 但一室を立出来る婦人こそ

之れぞ佐原子爵の奥方なり

と、見た正文、流石母子の血は争はれないもの、

正「阿母ちゃん」

と、云つて駆け付けやうとするのを、正義は抱き止めて、

正「これ、彼れはな、坊の阿母さんではない、他處の人だよ」

正文「いや、坊の阿母ちゃん、阿母ちゃんよ」

正「おう若」

正文「阿母ちゃん」

セメ「抱かんとする母 抱かれやうとする子供」

警「不可々々、爾うしちやア不可」

と、中を隔つる巡査の一言、

「阿、若、堪忍して頂戴ね、阿母さんは若を殺さうとしたに、好く若は生きて居